

前田映画ファンマガジン

憧憬 NO. 14

SHO KEI

1998.11

■特集

さよなら……

前田陽一監督



前田映画ファンマガジン 憧憬 NO.14・目次

■特集 さよなら……前田陽一監督

さよなら……憧憬の前田陽一監督

花も嵐も踏み越えて ○牧村利光 2

前田陽一監督への詫状 ○高橋 清 12

“偶然の出会い”から ○高橋千代 14

届け！ばらだいの前田陽一監督へ

憧憬通信 1987～1998 19

■Letter

池田博明 吉川隆夫 土田啓三 高橋 清 松田伸二 高橋(池田)千代

前田陽一 秋本鉄次 内海陽子 野原 藍 円尾敏郎 津田裕子

市川栄一 竹内和夫 古林洋二 新沼千春

■Column

幻の名作『枇杷の木刀』を読んで ○牧村利光 31

『美味しんぼ』は前田版『新しい天体』にならないか ○牧村利光 35

『酩酊船』第7集と『孤独な水鳥』を読んで ○牧村利光 37

前田陽一監督とのクリスマスの夜 ○高橋 清 41

『エッセイごっこ』を読んで ○牧村利光 46

編集後記

51

さよなら……憧憬の前田陽一監督

花も嵐も踏み越えて

牧村利光

前田陽一監督の葬儀・告別式が行なわれた5月7日は、五月晴れを乗り越して汗の滴るような暑い日だった。思わず、『喜劇・日本列島震度0』（73年）の挿入歌「東京の屋根の下」をやけクソぎみに歌いたくなる、《♪何にもなくても良い 口笛吹いてゆこうよ〜》という突き抜けた明るさ充ちた日だった。（17年前、前田監督に会いに横浜に行った時には、山下公園から港の見える丘公園あたりを「虹をわたって」を口ずさみながら歩いたアホな私です。いつか〈前田映画歌謡大全集〉を作りたい）。過激なる逸脱に充ちた熱気溢れる数々の傑作・怪作を生みだしてきた、前田監督の旅立ちにふさわしい日だと思った。

そのなかで、『にっぽんばらだいす』（64年）で赤線最後の日に殉じるかのように命を断つ娼婦（香山美子）を、『進め！ジャガーズ・敵前上陸』（68年）で戦後23年を経て硫黄ヶ島で玉砕する日本兵の生き残り（南道郎）を、『喜劇・あゝ軍歌』（70年）で戦地の精神病棟の広場で敵機来襲の恐怖から闇雲に駆け出し機銃掃射で斃れていく二宮金次郎ニセ気狂い（大村崑）を、『喜劇・命のお値段』（71年）でカユイカユイ病に発病して万歳する手に手錠をはめられたニセ医者（フランキー堺）を、『喜劇・男の子守唄』（72年）で青空マーケットに放火する倒産した元スーパーの社長（森川信）を、『虹をわたって』（72年）で家出娘（天地真理）をネタにその父親（有島一郎）に金をせびりにいって拒絶されるダルマ船の7人組（谷村昌彦ら）を、『日本列島震度0』で大地震は起こらず競輪での大穴の夢破れて公金横領で連行される地震対策室の職員

(石橋正次ら)を、『喜劇・家族同盟』(83年)でニセ家族のマイホームもろとも焼死するドヤ街の住人(川谷拓三)を……想う、前田監督〈終戦の日〉。

ふと、《花に嵐のたとえもあるさ さよならだけが人生だ》(井伏鱒二)という文句が浮かんだ。が、これはあくまで川島雄三監督にこそふさわしいフレーズだろう。死を見つめ、戦きながら《積極的な逃避精神》のなかに鮮やかに豁晦してみせた川島映画。それより、前田監督には《花も嵐も踏み越えて》というフレーズの方がピッタリくる気がする。それは11年前、前田監督に会った時、『にっぽんの喜劇えいがPART1前田陽一篇』を持っていきサインをしてもらったのだが、その本の見返しに前田監督は《花も嵐も踏み越えて 行くが男の生きる道》と書いてくださったから(竹内和夫著『酩酊船よみがえる夏』の冒頭にてでくる姫路の Snackbar に前田監督の色紙が立てかけてあって、そこにも《花も嵐も踏み越えて》と書いてあるノダ)、ということもある。この通俗的松竹メロドラマ『愛染かつら』の主題歌「旅の夜風」からの引用に、前田監督の心意気を窺うことはできる。通俗的であることを恐れず、通俗に塗れながら、通俗に流されず、通俗をテコに、通俗を食い破って、情念を解放しようとする悪戦苦闘することで、生活の地平にアナーキーな生を現出させた前田映画。前田監督は《花も嵐も踏み越えて》、行かれた。あの《X作戦》は遂行されたのだろうか。我等が《⊕軍団長》は何処へー。

今年、前田陽一監督からの年賀状には次のように書かれていた。《『唐獅子株式会社』が、四月からinしそうです。おとなしい脚本ですが、原作者、主役の赤井は乗っているそうです。企画中の『ナゴヤニアン逆襲』は、キムタクが出れば東海テレビが金を出すとか。ま、無理でしょうね》。今年こそ、待ちに待った前田映画がブレイクしそうな予感にときめいていた。

その矢先に突然、前田監督の訃報。前田映画のように意表を突かれ、悪い冗談デショと思った。悲しみより先に残念、無念、参ったといった言葉だけが頭の中を渦巻き、茫然となる。葬儀に参列して、照れたような微笑みとも苦笑ともつかない笑みを浮かべた前田監督の遺影(その笑顔のことを、映画評論家の

故・小川徹が《三分笑い》と書いていたのを思いだしたりした)を見つめていても、その死が現実感覚をともなって迫ってこない。かつて、『神様のくれた赤ん坊』(79年)と『土佐の一本釣り』(80年)で前田監督は遺影となって、スクリーンの仏壇に登場していたからだ。二度あることは三度あるというのではないかと、前田映画のワンシーンの中にいるような錯覚にとらわれてしまう。それでも、11年ぶりにお会いする前田監督の、精悍さは失われていないものの一回り小さくなられた顔を拝見した時には、さすがに前田監督は本当に亡くなられてしまったのだという現実突き戻されるしかない。三度目の正直だともいうのか、あゝ……。前田監督は、自らの葬儀の〈行列〉を、どんな想いで眺めておられたらうか。

僕は、本誌NO.13の『L e t ' s 豪徳寺!』(87年)論の末尾に次のように書いている。〈前田監督がなぜ、この映画を撮ろうとしたかは謎のまま。その謎を敢えて知りたいと思えないのが口惜しいけれど、前田監督はジグソーパズルの一片と共に姿をくらまして、その謎もまた空白のまま。空白に耐え続けることが、生き残ることであるかのように一。それにしても前田映画からは、あまりにも遠すぎるのだ。次回作で、前田監督がその空白を突き破って、“前田映画そのもの”がひたすら遠くへいくことを願うしかないだろう〉。さらに、編集後記で〈それにしても『L e t ' s 豪徳寺!』はなんとも奇妙な映画ではあって、前田監督はけっして投げているわけではなく、〈前田流にはやらない〉とひたすら“映画”に耐えているかのような倒錯のジレンマ。それゆえの空白感。南美江の「どうせ死ぬ身ですから……」なんて台詞が妙に頭の片隅にひっかかってくる映画ではある〉とも書いた。前田映画そのものが、前田映画の行く末を暗示していたのだろうか。

あれから11年間、前田映画にとってはスクリーンの空白に耐え続ける焦燥と諦観のいりまじった、それでも夢(映画)は捨てられないジレンマの日々だった気がする。様々な企画、題材が前田監督流に言うなら《暗闇のなかで怨嗟の声をあげ》、あるいは実現寸前で流れていった。その空白を一気に埋めるピースとして、前田監督が再び『唐獅子株式会社』(小林信彦原作)を取り上げた

のは、前田ファンとしても十二分に納得のいくことだ。というのは、78年に前田監督が高田純、荒井晴彦と共同で脚本化した『唐獅子株式会社』は細心にして大胆、ギャグがパロディが連鎖反应的に炸裂し、ついには映画そのものがアナーキーに疾走しはじめる、究極の前田映画ともいうべき傑作だったからだ。もし映画化されていれば、松竹人情喜劇の息の根は止まっていたらと思うせる、恐るべきスラップスティックだった。前作で『坊ちゃん』（77年）という前田映画的ではない題材で撮らなければならなかった前田監督の、それでも痛快娯楽活劇に仕上げってしまったアンビバレンスな欲求不満が、この脚本で過激に解放されていた。前田監督もこの脚本にかなりこだわっていたフシがあって、以降の作品に『唐獅子株式会社』が見え隠れしている。例えば、『神様のくれた赤ん坊』（79年）で突然見知らぬ子供を押し付けられた同棲中のカップル（渡瀬恒彦と桃井かおり）がその子供の父親探しの旅で最後に海運業を営む男を訪ねると、先代（嵐寛寿郎）が出て来て仁義をきる渡瀬に「今時、仁義は流行りませんよ」と言い、目当ての二代目はもうこの世の人ではなく（この遺影が前田監督で、ちゃんと半纏を着ている）仏壇に向かって未亡人（吉行和子）があらん限りの罵声を浴びせかけるシーン、『土佐の一本釣り』で金刀毘羅宮の石段で漁師達と清水のヤクザ達が擦れ違い、森の石松を気取るヤクザ（志賀勝）が「旅姿三人男」を歌い、仲間（粟津號）をヤクザに拉致されたと思い込む純平（加藤純平）がヤクザのもとへ殴り込むもののヤクザのほうがサラリーマン化していてシラけているシーン、『次郎長青春篇・つっぱり清水港』（82年）で殴り込みに備えての予行演習のはずがいつしか本当の出入りになっていたり、老親分（三木のり平）が引退するにあたり「出入りのときめきを、もう一度だけ味わいたい」と芝居の出入りを仕組むシーン等々……。

この脚本が実現しなかったことによって、以降の前田映画は本来の面白さから微妙にズレていった気配がある。確かに至る所に前田タッチは散見されるのだが、それらがどうしても映画の外側から加えられた印象が拭えず、点景に留まってしまう。従来の前田映画なら、前田タッチは映画の内側からフツフツと沸き上がり、映画をあらぬ方向に向かわせ、狂態を生き、ディテールの煮詰まりが全体を照射するような映画との緊密な絡み合いがあったのが、『坊っちゃん』

ん』以降それらはストレートで爽やかなものになっていった。それは当然、題材的に手垢のついた「坊っちゃん」や「旅行もの」や「次郎長もの」であったり、マンガを原作にした「青春もの」や「アイドルもの」であったことと無関係ではなく、前田監督は映画に距離を置けしかなく、前田映画の信管（《悪意や怨念や、爆弾や、ハートや、レモンやら……》これは20数年前、前田監督に初めて『憧憬』数号を送った際に貰った返事であった、魅力溢れる前田映画のフリーズ）に封印することで、辛うじて映画作家としての自己を貫いていたと思う。それは前田映画を恍惚とした境地に導く、フラッシュバックやカットバックといった手法が影を潜めていることでも明らかだ。

そのなかでは最も前田映画的世界への回帰を見せた『家族同盟』も、「ニセ家族」といったいかにも前田監督好みの題材であるにも拘わらず、ニセモノがわがもの顔でまかり通る時代にあっては、映画の中に再び前田映画を仮構していくというまどろっこしさを踏まえねばならず、『あゝ軍歌』や『命のお値段』といった傑作にみられたニセ指向の苛烈さが炸裂するまでには至らなかった。こうなってくると題材的な問題だけに留まらず、そこにはどうしようもなく〈時代〉というものが横たわっていたのかもしれない。前田映画には、その時々時代の風潮に絡み、何らかの形で時代と切り結ぶことによって独自の映画世界を現出させてきた側面があり、80年代以降、時代が加速度的に混迷していき、そのくせライトで 트렌ディーといった時代の表層で狂気が隠蔽されていくなかで、前田映画のキワモノ性を発揮しがたくなっていったのも事実だろう。それでも邦画が時代から置き去りになり、いかがわしい魅力を失っていくなかで、前田映画こそ突破口になりえると想いつ続けてきたのだが……。前田映画に長い冬の季節が訪れてしまう。

冬に耐え、98年の季節は文字通り春、前田映画は11年ぶりに再始動する。その名は『新・唐獅子株式会社』（「新」がつくのは、『唐獅子株式会社』は83年に曾根中生監督によって東映で映画化されたことがあるから）。僕が《次回作で、前田監督がその空白を突き破って、“前田映画そのもの”がひたすら遠くへいくこと》を願ったのは、ブーメランのように遠心力が求心力に転化され

るベクトルを期待していたので、『唐獅子株式会社』の映画化は前田映画の再出発にふさわしい。この『新・唐獅子株式会社』（脚本は、78年度版でも全く腐食していないが、前田監督が北里宇一郎と共同で新たに執筆したもの）が実現した背景には、きっと昨今のVシネマやオリジナルビデオにおける「ネオヤクザ映画」とでもいうべきジャンルの隆盛があり、つまり、前田監督は常に〈早すぎた映画監督〉であり続けてきたわけだ。ところが、その撮影中に前田監督は現場で倒れ、そのまま亡くなってしまうという俄には信じ難いことが起こってしまった。前田映画そのものに遠くへ行ってほしいとは願ったが、まさか前田監督自身がこんなにも早くひたすら遠くへ行ってしまふなんて、夢にも思わなかった……。〈ピンチにはめっぽう強いけれど、チャンスに弱い癖がある〉前田監督のチャンス弱さが、肉体のピンチを凌駕してしまったのか。11年間の映画の空白に耐え続けてきたことで、より激しさを増した映画への渴望が、前田監督をスクリーンの彼方へ越境させてしまったのか。その空白を前田監督は、最後の命の燃焼で埋めたのか。それとも前田監督流の痛烈なる韜晦なのか。

それでも、そこからは不思議と刀折れ、矢尽きたといった悲愴感は漂ってこない。前田監督の死が、こちらの安易な感傷など吹き飛ばしてしまう潔さに貫かれていたからだろう。前田監督が倒れ亡くなられた地が、『虹をわたって』や『家族同盟』等で舞台になった前田映画の故郷ともいうべき〈横浜〉であったことに思い至るとき、前田監督はぎりぎりまで前田映画を鮮烈に生き抜いたのだと胸を衝かれ、感動するしかない。テーマ主義を排し〈何を描くかより、どう描くか〉に腐心し、血を流し悲鳴を上げつつも〈芸術映画より芸能映画〉を指向してきた前田監督は、どのように死ぬかという時点でも、見事なまでに映画的な死を体現してみせた。もちろん、そんなシチュエーションは作ろうとして作れるものではない。その時、映画の菩薩が前田監督に微笑んだのだ。前田監督は〈最後のプログラムピクチュア作家〉としての栄光（ATG的な作品は1本も撮らなかった）と悲惨（11年間も撮れなかった）を背負って、『にっぽんばらだいす』で女達（ホキ徳田ら）が砂塵まきあげるトラックの上で「バカヤローッ！」とか叫びながら赤線を去っていくように、『進めジャガーズ！敵前上陸』で日本兵の生き残りが硫黄ヶ島の悪玉（内田朝雄）に突撃するよ

うに、『あゝ軍歌』でニセ家族（フランキー堺、北林谷栄ら）が御霊神社賽銭泥棒に向かうように、『命のお値段』でニセ保険所員（フランキー堺）が悪徳食品会社の中に消毒液の粉を撒き散らすように、『男の子守唄』で焼跡闇市派（フランキー堺ら）がスーパーマーケットの焼跡に集うように、『虹をわたって』で家出娘が王子様（沢田研二）とヨットで見知らぬ国に旅立つように、『日本列島震度0』で若者達が「地震コーイ」とウエディングドレス姿（鳥居恵子）で競輪場に現れるように、『土佐の一本釣り』で八千代（田中好子）が断崖から紺碧の海に飛び込むように……、出立していかれたのだ。その先は映画の荒野か、いや、映画の森であること願わずにはいられない。

前田監督が撮影途中で斃れたことによって、『新・唐獅子株式会社』（1/3は前田監督が撮り、後を託された南部英夫監督と残されたスタッフによって映画は完成されたが）は前田映画そのものとしては未完の遺作となっけし、不発弾のままだ。けれども、思えば前田映画は常に不発弾を抱え込んできたのだ。いつ爆発するやも知れぬ危機感とも期待感ともつかない想いを喚起することで、あるいはそれは紛れもなく爆発するのだという思い込みのリアリズムによって、前田映画は逸脱に充ちた生き生きとした表現を獲得し、僕らの鬱屈や情念を解放してきた。だから、その信管は決して抜かせないところに、前田監督の作家としての闘いもあった。さらに、それでもそれはどこまでいっても不発弾に過ぎないことに前田監督の批評精神は宿り、決して自爆（犬死）はしないという強靱な意志によって、前田映画は〈可能性の映画〉としてときめいてきた。

前田監督は今、不発弾を抱えたまま地中深く眠りにつき、あるいは89年に前田監督が書いた唯一？の純文学の脚本『ダイヤモンドダスト』（南木佳土原作）で描かれたように《星のかけら》となって宇宙を漂う。そして、いつの日か再び不発弾はどこかで掘り起こされてひょっこり顔をだし、星のかけらは隕石となって地球のどこかに落下して、人々を震撼させ、あるいは狂喜させるにちがいない。

前田監督が、監督生活34年で残した映画（いわゆる劇場公開作品）は26本。

多いのか、少ないのか。やはり、〈……願わくば連作を！ 濫作すればするほど映画が面白くなるというフシギな才能に、わが前田陽一は恵まれているからである〉（映画評論家・松田政男）のだから、少なすぎると思う。ここでも、最後の11年間の空白は苦くも痛い。実際、70年から72年にかけて前田監督が松竹と東宝を股に掛けて撮りまくった時期の前田映画（3年でなんと9本！）は、傑作・怪作入り乱れて尋常ならざる輝きを放っている。その26本のうち、僕が見ているは20本。『喜劇・右むけ左！』（70年）以降の作品はすべて封切り時に見ているが、『にっぽんばらだいす』『進め！ジャガーズ・敵前上陸』『あゝ軍歌』は自主上映で、『七つの顔の女』（69年）はテレビ放映で見た。まだ、『涙にさよならを』（65年）『ちんころ海女っこ』（65年）『スチャラカ社員』（66年）『濡れた逢びき』（67年）『喜劇・冠婚葬祭入門』（70年）『新・唐獅子株式会社』（98年、現時点では未公開）と6本も未見のまま。とくに、『ちんころ海女っこ』『スチャラカ社員』の2本は、前田監督に「機会があったら是非見て下さい」と言われていただけに口惜しい。これらの映画が何とか見れることを願いつつ（でないと、前田映画の全貌は見えてこない）、再見してみたい前田映画も多い。前田映画のフィルムの蠹きと明滅のなかに、前田監督の想いは生々しく永遠に生き続けているのだから……。

本誌はもともとは、70年代に『キネマ旬報』の読者欄の常連投稿者を中心にしたシネコミの個人誌ブームがあり、それに乗り遅れまいと真似事で始めた「邦画感想文集」のようなものだった。誌名の『憧憬』は、その当時好きでよく聴いていた小椋佳のアルバム『残された憧憬』からとった。そのタイトルには確か「あこがれ」とルビがふってあったと思うが、さすがにあこがれでは気恥ずかしく、「どうけい」では語感が重い気がして、国語辞典で調べていたら「しょうけい」という読み方があり、これは軽やかな感じで気に入ったのだ。その創刊号（74年発行）で、僕は今読み返せば顔から火が出る次のようなあとがきを書いている。〈いつのころからか、日本映画しか見なくなった。それは良くも悪くも、邦画のなかにこそ、よりはげしく様々な憧憬、それぞれの僕を見いだしてしまったからだろう……。

『初めての旅』の二人のように旅立ちたい。『制服の胸のここには』の二人のようにサイクリングに出かけたい。

中川梨絵は、僕の憧れの女(ひと)。前田陽一は、僕の心の友。いろんな映画があって、思うようにいかないことも、わかりあえないこともいっぱいあるけれど、いつか(そんな時など決して訪れはしないだろうが)みんな、お手でつないで歩きたい。映画は、ぼくらの夢の散歩、しょうけいの地、あこがれの海さ。そして、そのなかをかるやかに歩き泳ぐためには、きつといたずらに“夢の世界”にからめとられない力と、“映画世界”を通しての自己を客体化できる柔軟さをこそ、やしなわなければならないのだろう》。

その誌面がいつしか前田映画で埋まっていったのは、シネコミとしての特色を出したいということもあったが、前田映画こそ日々鬱屈していた僕の想いを最も解放してくれ、シツチャカメツチャカな逸脱の果てに突き抜けて行く明るさに鼓舞され、人間のどうしようもなさを見据えうえで人間をまるごと愛してしまおうとする強靱さに救われ、そして何より僕の映画への夢を前田映画にこそ賭したいと思ったからだ。

前田監督は「簡単に抱負をのべるには厳しすぎる社会でね。状況がどう展開していくか、つかみ難いところがある。まあ、そういう中で、自分で気のいく映画を一つでも二つでも作りたいね。……」(『にっぽんの喜劇映画 前田陽一篇』の「苦しまぎれの喜劇〈自作・自伝を語る〉」)と言っておられたが、不遜な言い方をすれば本誌は前田監督が少しでも快くなり、気のいく映画を作るための糧となるべく情熱を傾けてきたつもりだ。ただ、あまりにも前戯?が下手すぎて、それどころかこちらの方が先に気持ち良くなってしまってマスターベーションに終始していた面は否めず、自らの非力を痛感するばかりだ。それでも、映画監督と一映画ファンとしての緊張関係を持続してこれたのは、前田監督が僕の的外れな批評や勝手な思い入れに実にきちんと対応してくださったからだろう。そのことに感謝しつつ、もし本誌が少しでも前田映画に寄与することができたとするなら、それは厚かましくも前田監督に無理を言って『つっぱり清水港』『家族同盟』『Let's 豪徳寺!』の3作品について原稿を書いていただき、掲載できたことだ。これは、『にっぽんの喜劇映画 前田陽一篇』

以降（『土佐の一本釣り』については、製作ノートが『イメージフォーラム』に掲載された）の「前田陽一自作を語る」をフォローするものと自負したい。前田監督も「これらの文章を加えて、『にっぽんの喜劇えいが 前田陽一篇』を再版したいね」と言ってくださった。

本誌で僕が費やしてきた言葉が、何処まで前田映画に迫れたかを鑑みれば甚だ心許無く、〈前田映画城〉の外堀ぐらゐは埋められたかもしれないが、本丸はまだ遥か彼方だ。『神様のくれた赤ん坊』で小夜子（桃井かおり）がルーツ旅行で〈白いお城のある原風景〉を追い求めるように、僕の前田映画への旅は（未見の映画があることも含めて）まだまだ終焉を迎えるわけにはいかない。

本誌を「前田映画ファンマガジン」と銘打った頃から、『憧憬』という誌名はそぐはない気がして（でもまあ、前田監督への憧れで発行しているから、このままでもいいかと思いつつも）、前号で誌名を前田監督のデビュー作にちなんで『前田えいが ばらだいす』に変えるつもりでいたのだが、『Let's 豪徳寺!』にはどうしてもばらだいすという気分にはなれず、従来のままになっていた。あれから11年、まさか前田監督自身が、〈ばらだいす〉に旅立たれてしまうことになるとは……。誌名を変えることが出来ないまま、本誌は文字通り〈残された憧憬〉になってしまった。ならば、僕は残された憧憬を、〈前田映画の戦後〉を生きなければならない。だから、やっぱり、いつも心に前田映画を！

※本文は、『酩酊船』第13集〈特集 追想の前田陽一〉に掲載してもらった『さよなら……、憧憬の前田陽一監督』に加筆したものです。

前田陽一監督への詫状

高橋 清

久しぶりに劇場で、何回目かの『喜劇・あゝ軍歌』を見た。あたりまえだが、おもしろくて傑作である。前田作品の中で、僕にはこれがベスト・ワンだ。その事をあらためて、前田監督に知らせたかったが、監督の天国の住所が分からない。帰り道、前田監督の亡くなったことの悲しみと寂しさがどっと胸にきた。

この二十何年間、僕は前田映画ファンとして、前田陽一監督作品を見て、前田監督自身ともつき合いをさせてもらった。前田監督は、こちらが恐縮してしまうほど一ファンの僕にもいろいろと気を使ってくれた。プロデューサーの細谷隆広氏と勝手に恒例化してしまった、町田、千駄木とつづいた新居訪問にも、イヤな顔ひとつ見せず、嬉しいほどの持て成しをしてくれたのだ。

映画監督と一ファンの普通のつき合いかたというものが、どういふものか僕には分からないのだが、僕は前田監督に、ファンとして幸福なつき合いをさせてもらったと思っている。スクリーンを見つめるだけの僕にとって、映画監督は遠い存在であった。でも、前田監督のお陰で、身近かなものとなった。僕は前田監督を知っている事を誇らしく思い、その事で前田監督に迷惑もかけたりした。

前田映画を見るきっかけとなったのは、『喜劇・男の子守唄』だった。前にも少し書いたことなのだが、この映画を横浜の三番館で三本立ての中的一本として見たことが、僕が前田映画ファンになる始まりだった。しかし、それは良い入り方ではなかった。なぜなら、見終わった後に、僕の心の中に残ったのは笑いではなく瘡（しこり）だったのだから。スーパーマーケットに火をつけた

森川信を、フランキー堺たちは許し、焼跡時代のコスチュームで、「あの当時は何もなかったけれど、なにか希望のようなものはあったな」と、感傷的になるのである。そのところが僕には引っ掛かった。そのこだわりが、僕を前田映画ファンに育てた。前田監督の古い作品を見る為に浅草や川崎や上板の劇場に通った。

見つけているうちに、「焼跡」や「夕陽」や「ニセ者」や「戦争」や「再生」という前田監督のこだわりのキーワードを見つけたりした。前田陽一の世界にさらに入っていくうちに、「男の子守唄」のフランキー堺たちの気持ちが分かってきた。それは、前田作品の一つのテーマでもあるところの、日常のなかでダレきってファイトしなくなった人間が、非日常というシチュエーション（自衛隊一日入隊や地震）によって、はつらつとした人間として再生するというパターンが、けしてアナクロ的なものではなく、僕の生活の中でも通じるものと生理的に理解できたからなのだ。

何年か前のクリスマスの夜。千駄木の前田監督の家で少し酒に酔った僕は監督に失礼なことを言ってしまった。「『Let's 豪徳寺!』が前田監督の遺作になったら、ちょっと寂しいですよ」と。監督の病気のことも、撮れなかった十一年の長い苦しみも考えずに本当にひどいことを言ってしまった。ファン失格である。だから、新作の『新・唐獅子株式会社』の撮影中に前田監督が亡くなったと知らせてもらった時、すぐにはその死が信じられず、悲しみよりも、クリスマスのあの夜の一言が、ニガミとなって蘇ってきたのだった。

けれど、あえて無責任に言わせてもらえれば、現役の映画監督として亡くなった前田監督はりっぱだと思う。監督は僕の中で永遠のものとなった。

前田監督、あの世で会うまでに、もうちょっとまっとうな前田映画ファンになってるつもりです。その為にも形見として残してくれた前田作品をこれからも見つけます。

前田監督ありがとうございました。僕がそっちへ行くまでのちょっと長いお別れです。

“偶然の出会い”から

高橋千代

最初に見たのは『神様のくれた赤ん坊』、のめり込みの始まりは『喜劇・あゝ軍歌』。いずれもリアルタイムではなく、公開時に間に合ったのは『次郎長青春篇・つっぱり清水港』から。そんな遅まきながらの前田映画ファンである私が監督ご本人とお近づきになれたのは、たまたま偶然が重なったことによる。

前田さんも何かある毎に私を招んでくださった折には、「不思議な縁でね、偶然が重なったんだな」と付け加えて紹介してくださっていた。

90年の暮れには、オリジナル脚本のTV作品『説教強盗』の撮影にお忙しいさなか、私の結婚披露宴においていただき、図々しくもスピーチまでお願いしてしまい、その折にも“偶然の縁”のお話をしてくださった。

事の起りは12年前の冬、大学サークル（映画を見て勝手なことを言い合う、怠惰な集まりだった）の“卒論”のテーマを前田映画と決め、資料として映画書房の『にっぽんの喜劇映画 前田陽一篇』を探していたのだが、すでに入手困難、やむなく京橋のフィルムセンター内の図書室に出かけ閲覧願いを出す。この図書室は貸し出しは不可、コピーは当時でも1枚40円…となる貧乏学生は閲覧室で眺めるか書き写すしかない。しばらく眺めてから未練残しつつ去ったのだが、なぜかたまたまこの場に元・キネ旬報社社員で『にっぽんの～』にも深く関わっている吉田成己氏がいらして係の方に私の住所・氏名を訊き出し、横浜の前田監督にこの旨ご一報くださったという。（ついでに、図書室の閲覧カードの内容も一応守秘義務はあるが、この日の係員がたまたま吉田さんの知人だったとか。）

数日後、アパートに書籍小包が届く。差出人の“前田陽一”の達筆の名に仰天、興奮しながら開封、手紙を読んだことを思い出す。

「突然のお手紙で失礼します。私は映画監督をやっているものですが……」
始まりの一文からして、トボけて可笑しい。

「私の映画のことなど調べてくださるのは、かなり少数のもの好きな方だと思いますが（略）もしお役に立てばと思ひ、手許に少し残っている中から一冊差し上げます。かえって恐縮ですが、もらってください。何か分からないことでもあれば、遠慮なく電話でもください。」

同封の本の見返しには、私の名前の横にカッコ付きで、（フィルムセンターの奇縁で）と記されている。昭和61年2月1日の日付入りで。

今以上に未見の前田フィルムが多々あったが、おかげで張り切って“卒論”を仕上げる事ができた。この“極私的前田陽一映画論”のキーワードは「行列の多用」と「非血縁集団の肯定」などという今思い出しても気恥ずかしい内容で、学生時分に蓮實重彦の映画論講義を聴いていた挙句のカブレ症が文体にも表われている代物だった。

この文章を載せたサークルのミニコミ誌を前田さんにお送りして読んでいただき、「行列ってのは気づかなかった。言われてみるとそうだね」と言われ、こちらも嬉しくなった。（後に前田さんから、同人誌に書いた小説『枇杷の木刀』にも武者行列が出てくるとも教えていただいた。）

“卒論”原稿は私の手許にはもう無いが、昨年5月の入谷での集まりのコピー資料に、佐藤利明氏が原稿の“行列”の部分を持ち上げてくださっている。『にっぽんばらだيس』のラスト、『喜劇・日本列島震度0』の訓練のシーン、『次郎長青春篇』の隊列……e t c。

幻のキャンディーズ映画の脚本のなかにも、浮かれたキャンデーズ・ファンの行列がハメルンの笛吹きのように踊らされて海に入っていく—という件を用意していた前田さんだが、当時の私はこれら“行列”に対して前田監督の悪意、軍国主義への否定、個人で何も考えない踊らされている集団等の否定的意味合

いを覚えて見ていた。けれども、今思えば『日本列島震度0』での避難訓練中の福やんはイキイキとしており、次郎長の隊列も楽しげで、他の作品においても“お祭り”状態に近いシーンが多く、こうなると実は行列の絵柄こそ前田さん好みだったと思えてくる。

血のつながりのない仲間で集団犯罪を企む作品が多いのは（前田さん自身が「独身」を長く通したことも頭をかすめたが）、血縁集団や家族関係への否定か、などと短絡に考えて書いたりもしたが、つい先日「あれは逆で、血縁への強い思いの裏返しだと思う」と、新宿武蔵野館の高橋清氏に指摘され、そうか！と思っ直している。『喜劇・猪突猛進せよ！』『喜劇・大誘拐』と先頃ビデオで見直すと、「やっぱり親子だものねえ」とミヤコ蝶々の台詞が出てきて、ますます考え直したりの有様である。

あんな若気の至り、思いこみばかりの原稿を、名文家の前田さんがよく読んでくれたものだと思う。

本（にっぽんの喜劇えいが）が届いて3ヶ月ほど後、前田さんからお電話をいただき、横浜で初めてお会いすることになる。

色黒で精悍な顔つき（アルコール焼けかもしれないが）の前田さんはジーンズがよく似合い、私の父親と同年と思えず実に格好良かった。

監督いわく「横浜のおのぼりさんコース」をぐるりと案内していただき、その中には当然『虹をわたって』や『喜劇・家族同盟』を思いおこさせる場所も含まれる。途中で、この幸運な出会いの仕掛け人である吉田成己氏と合流、「中華街は表通り（のメシ屋）は駄目だな」とは監督の言、3人で馬車道の生香園に入る。前田さんと同行してボ～ッとなっているせいもあるが、何だかわからないけど美味かった、という記憶が残っている。終いには、前田さんのマンションまでお邪魔してしまい、途中で買った甘味をとり出し、「やっぱり桜餅は道明寺がいいですね」「そうだね」などと云いつつ酒を飲みつづける前田さんと吉田さんを前に、酒の飲めない私はボンヤリとこの一日を思い返していた。

以後、時折前田さんからご連絡をいただいたり、あるいは情報誌でたまに前田映画特集の名画座など見つけるとこちらがお伝えして……と、年に何度かお会いする機会を得た。

好きな映画作品をその監督ご本人と並んで劇場で見る、というファンとしてはこの上なく幸福な体験を何度かさせていただいている。さらに初めてお会いしたときの生香園の中華が美味だったのに始まり、お酒の好きな前田さんはおいしい食べ物屋にも詳しく、同道した映画館とともに、ごちそうになった物の記憶がついてまわる。浅草新劇場と飯田屋のどじょう鍋、大井武蔵野館と永楽のこがしネギ入りラーメン、東銀座で“カンヅメ”になっていた時にごちそうになったチーズ・フォンデュ……町田に引っ越された時も早々に招んでくださり、引っ越しそばならぬ引っ越しそうめんをふるまってくくださった。もちろん播州手のべそうめんである。そうめんをいただきつつ、ビデオで『龍野の四季』『喜劇・男の子守唄』を皆で見た覚えがある。

前田さんと二人で最後に見たのは96年の暮れ、横浜・黄金町のシネマジックでの『日本列島震度0』『あゝ軍歌』の2本立て、フランキー堺追悼特集だった。灰田勝彦の「東京の屋根の下」に合せて前田さんは小声で口ずさんでらした。映画のあと、吉田さんと久しぶりにお会いして合流、近くの韓国居酒屋に入る。前田さんにお会いしたのもしばらくぶりで、ちょっと顔がやせたかな、元気がないなと思いはしたものの、韓国産のホントの“真露”を「うまいねえ」と飲み干す姿に、やっぱり前田さんだなと安心していた。

ややあって監督がトイレに立たれたとき、吉田さんの口から監督の身体のこと、病名をきく。前田さんはもう危ない一と、このとき頭では理解したように思うが、じきにもう二度と会えなくなるという実感は湧かなかった。

翌5月には入谷での前田映画ファンの集まりで元気なお姿を見ているから、どこかでもう大丈夫だという思いがあった。新作の準備も進んでいる、さあこれから前田映画の巻き返しだとの雰囲気でも盛り上がり、前田さんの病状のことは頭から消えてしまい、結局私は今年5月3日の報に何の覚悟もできておらず、呆然とするばかりだった。

短い間だったが前田さんと直にお会いでき、楽しい時間を過ごさせていただけたのは、前述のとうり、偶然の重なりと、吉田成己氏のご尽力、ファンを大事にする前田さんの心配りによる。何かにつけて「偶然だったよねえ」と口にした前田さんが、1度だけ「偶然じゃなくて、きっと決まっていたんだよ」とおっしゃったことがある。

90年ごろだったか、未映画化の『ダイヤモンド・ダスト』の脚本を書いていた頃だと思う。「私の稚拙宇宙観」（酔酌船第7集）にも書かれているが、この当時、前田さんは宇宙関係の本をいろいろ読まれ、この世におこっている出来事は偶然のように見えて実は宇宙の始まりから今まで、全て予定されているのではないか、という推論を導き出す。

「だから、こうやって会えたのも偶然のようで、実は決まっていたんだね」と、地下鉄車内でにこにこしながらおっしゃったのだった。

宇宙観から目の前の現実までやや強引につなげるのも前田さんらしいロマンチズムで、私の中には嬉しい言葉として大事にしまいこんである。けれど、当の前田さんがこんなに早く逝ってしまうことまで予定されたこととは考えたくない。やはり私は、偶然のくれた出会いに感謝するばかりである。



届け！ばらだいの前田陽一監督へ

憧憬通信

1987～1998

Letter & Column

■「憧憬」NO.13、ありがとうございました。

『Let's 豪徳寺!』は、素材からいえば、〈前田映画〉になりようもないのですが、私は大変面白く見ました。感情移入できる登場人物はいないのですが、前田映画独自のリズムはちゃんとあり、三田寛子と村上弘明のやりとりも妙におかしいし、紺野美沙子や岡安由美子のつっぱりぶりも寛容に見ることができました。三田寛子の演技は、てらいがなくて好感がもてました。例えば大西結花や『本場ちょしこうマニュアル』の工藤夕貴、『私をスキーに連れてって』の原田知世、『永遠の1/2』の大竹しのぶの“いかにも!”という演技っぷりよりは、ずっといいと思います。(『永遠の1/2』は根岸一時任映画として、『俺たちのウェディング』に匹敵する傑作だと思っています)。牧村さんが指摘している「描写の空白感」(p3)、「いいかげんでデタラメだが硬直している」(p4)ことが、『Let's 豪徳寺!』のむしろ魅力なのではないでしょうか。日本映画の演出がアクションやスペクトルに重点が移って、リクツが単調になってしまっている現在、『Let's 豪徳寺!』のリクツの多様性は、とても魅力でした。例えば『トットチャンネル』のリクツのうすさに比べたら、『恋人たち

の時刻』のリクツへのこだわりにも劣らないのではないのでしょうか。

【池田博明・大井・87/11】

■『憧憬』13号戴きました。本当にありがとうございます。牧村さんの情熱の維持力に、正直のところ久し振りに味わう“何かやらねば…”という気持ちが湧き上がって来た次第です。

実の処を言うと実生活が公私共にとくに「公」が忙しく、34才という年齢もあってかスタミナ消耗が著しくて少しゆっくりできるかと思うとゴッゴッ眠ったりして、見たいビデオもたまる一方なのです。

残念なことにその「公」である医業が苦しいながらもやりがいがあり、非力な自分としては全身の力をこめなければ満足はゆく結果が得られない有様で、余裕のないこと甚だしいのです。今年は映画館では3本しか見ていません。その分、V I D E Oでの鑑賞が多いのです。長男悠規（S61.5.21生）も得、いやが上にも社会人として、父としての義務がのしかかってくるのですが、いつまでも一映画ファンとして“青くささ”を忘れたくないと思うのです。来年の秋までには何かまとまったものをお送りできると思います。

【吉川隆夫・堺・87/11】

■「憧憬」NO.13、読ませていただきました。そちらも、全篇ワープロにしたのですね。読みやすくなった反面、前号までのゴツゴツした手書きの方が、マイナーな熱気がこちらにまで伝わって来る快感があった気がします。

自分で作ってる時には感じませんでした。こうやって人の作ってる本を見るとそんな気がしまして、これは私も反省せねばと思った次第。しかしとにかく、スゴい持続力ですね。私の「シネマ刑務所」の方は、仕事が忙しくてなかなか進んでおりませぬ。

最近見た映画では「ゆきゆきて、神軍」「トットチャンネル」「永遠の1/2」が傑作、テレビでは11/15TBS日曜劇場「君にささげる歌」（市川森一脚本）が、私の学生時代を思い起こしてくれた秀作でありました。「L e t ' s 豪徳寺！」は未見です。

【土田啓三・吹田・87/11】

■「憧憬」NO.13、どうもありがとう。と言うよりも、ご苦労様って言った方がいいかな。今回は「L e t ' s 豪徳寺！」に愛情が持てなくて（一回しか見

てないものね)、短い文章しか書けなくて、すいませんでした。

牧村さんの文章を読みかえし読んでいたら、なぜか心良い嫉妬を感じ、捨てた女(いや、そんなことはなく捨てられた女)は、実はとてもいい女だったんじゃないかというような思いにさせ、もう一回見てみようという気にさせました、本当。

前田監督の文章はなぜか、ほのぼのと心に滲みしました。昔、知人でそんなに前田作品を見てない人でしたが、その人が会社の面接で尊敬する人は?という質問に、前田陽一って答えたことがありました。僕はこの話が好きです。なんか、前田さんの人柄を良く伝えています。ただ、映画監督にとって、人間性が作品と拮抗していることが幸福だとは、単純には言えないみたいなのですが。

編集後記で、牧村さんが池田さんの文章に触発されて、“ファイト”する姿勢が見えて、ほほえましい感じがしました。

最近では、「憧憬」を読むことによって、前田映画に真の意味でのエンド・マークをつけられるような気がしています。

【高橋 清・横浜・87/12】

■今回のワープロ文字の中で、やはりカントク自身のメモが説得力充分で、興味深く読みました。桜井出身で大船で小品2本ばかり撮った某カントクさんも、晩年は姫路で小鳥屋していた事を考えれば、前田さんどうかいのちある限りがばって頂きたいです!

【松田伸二・桜井・87/12】

■初めて御便り差し上げます。昨日、前田監督から送られた「憧憬」13号が届きましたので、早速拝見させていただきました。

以前に前田さんから「土佐の一本釣り」「つっぱり清水港」の号をいただいていたので、存じあげてはいたのですが、今回はワープロできちりきれいにまとめられ、一段と見易く丁寧に仕上げられたご様子、そこへもってきて、前田ファンとしてはまだまだヒョッコの私めの拙文を大っぴらに載せていただけるとは、まことにお恥ずかしい限りです。こうなって読み返すと、あらためて言葉遣いのガラの悪さ(実際の私とはと申しますと、やっぱりこの文調の如く、粗雑な人間なんです)、まとまりの無さ、尻すばみの構成e t s. が目立つばかりで、穴にでも入りたい気分です。

ともあれ、私のような前田ファンもいることを認めていただけたことを嬉しく、光栄に思っております。「家族同盟」以来のファン・マガジン製作、ほんとお疲れ様でした。重ねて御礼申し上げます。

牧村さんの「L e t ' s 豪徳寺！」論は、（私も含めて）この映画に対してはつい口ごもりがちな前田ファンの逃げ腰ぶりと裏腹に、はっきり的をつきえた誠実な文章だなと思います。

封切2日めの4/11の日曜日に勢いこんで見に行った一三年余も新作を待っていたファンは皆勢いづいて見に行つたろうと思いますけど—私は、今までの前田映画で味わった昂揚感をおぼえず、なんとはなしに空ろな気分で映画館を出まして、時間が経つごとに「幼稚園の先生の大アップや、卒園の唄があったじゃないか」だの、「車をすっとぼして化粧顔で“泣いて”みせる三田寛子たちは、ジャガーズの結末を思わせる」とか、「柳沢、岡安のベッド・シーンは『にっぽんばらだす』（未見です）に通じるものかな」等々…言い訳がましいフォローで考えたりしたのですが、やはり判然としない。つまりは「からっと」した爽快感に欠け、か—と熱くなれる共感が湧かなかったからなのでしょう。牧村さんはそのあたりを“空白”のキーワードを駆使して、場面場面をあげ、わかり易くまとまった論を展開されていますね。おそらく当の前田監督ご自身が1番よく判っておられると察しますので、めげずに次回作に期待を賭けております。果していつ劇場でお目にかかれることやら、皆目わかりませんが。

私は（もう2年も前ですが）、あのような駄文を書いた弊害でしょうか、前田作品では“行列”と“非血縁集団の連帯”にまずこだわるようになりがちで、以前は映画を素直に愉しみつ、たまたま何本か見るうちにそういう共通項を感じたにすぎないというのに、今や本末転倒でして、ハナから「行列」「非血縁」というワクをあてはめて前田映画と対峙しているような気がします。

例えば「L e t ' s 豪徳寺」でも血のつながっている豪徳寺家の人々は実は気持はバラバラだが（血縁関係を信じない前田映画？）、赤の他人の百合や手伝いの婆さんの存在で活気づくあたりとか、岸田今日子を先頭としたオートバイの隊列などにあてはめてみて、「あ—、前田映画の特性が表れている」としたり顔で言ってみたとこで、血気走るエネルギーを感じられなかった以上、無

意味なへ理屈にすぎないんですよ。

「行列」に対して死一退廃に至る直線運動という牧村さんの論は確かに言い得て、鋭く深いところをついていて、失礼ながらうーんと唸ってしまいました。

つい2、3日前、「憧憬」が出来上がったことを通して前田さんからお電話をいただき、少々お話したところによると、監督も「行列」に関しては今まで全く無意識だったとのこと、それでも後で気づいたら、最近撮ったTVの府中刑務所ものも、終わり10カットくらい延々と行列シーンだそうで、「自分でも驚いたね」と仰有ってました。秀れた作家は無意識に自分の作品中に映画を活かす刻印を残すものではないか、という考えが更に深まった次第です。そう考えると、あとから意識的にごたごたと理屈をつけて論評など書きつらねるファンという立場に時折空しくもなるのですが。……と書いてはみたものの、正直云って好きな作家の作品、人柄云々を同じファンどうしであーだこーだと好き勝手に言い合うのは実に嬉しい！ で、今後も大いに（ひじょーに語弊はありますけど）前田さんとその映画をサカナにしつつ楽しみたいと考えておりますので、若葉マークのとれない1ファンですけど、どうぞよろしく願いいたします。

【池田千代・豊島・87/12】

■「憧憬」NO.13どうも有難うございました。

ワープロ活字体にかわって、いよいよスッキリと見てくれがよくなりましたね。但し中身は皆さん懸命に「空白に堪えて」くれてる感じで、心が痛みました。

それにしても、あなたの文章で「空白に堪える」とは面白い視点を見つけてくれたものです。なんか「空白に堪える」という極細の棒を探し出してきて、「L e t ' s 豪徳寺!」という円盤の中心をささえ、奇術のようにその円盤をくるくる回している感じです。しかし、不思議や、その棒で支えると円盤は落ちそうで落ちこちないですね。やはり、あなたは有難くも私の作品は沢山観てくれているので、その総量からくる感覚と「L e t ' s」との誤差の中から、私がああ作品を作っているときの虚空で手を搔いている感覚が直感できたのでしょうね。それを人物たちのありようや、細部を列べて、作者の意識下にあったあの作品への対し方を論理化してくれたものだと思います。

意識下といえば、あなたも指摘されているように池田さんの文章の「行列」と

いう視点も、私自身これまで全く意識していなかったことなので感心しました。あらためて、自作品をふりかえってみてなるほどと思いました。キャンディーズに関する文章からまで引用しているのには参りました。そういえば、最近アルバイトで作った「府中刑務所実録二十四時」という12チャンネルの番組のラストでは、囚人たちの行列を何カットも重ねてエンド・マークにしていたのです。池田さんの文章は、そのとき全く意識しておりませんでした。やっぱりそんな視点が見つけられるのも、あの若さでどこで観てくれたのか知りませんが、私の凡作どもを沢山観てくれたからだと思います。全く作者冥利につきます。

現在、前に話したことのある豊田商事がらみの話を考えているところです。ただし、まだシナリオまでのゴーサインは出ていません。あてにならぬ会社ですが、シジフォスの神話のように、山から落ちてくる石をくりかえし頂上に運びもどす作業をつづけるつもりです。「空白に堪え」つつね。

正月こちらに来られないかと奨めてしまいましたが、申し訳ないのですが、母の一周忌をくりあげて行うため、正月は田舎に帰ってしまいます。すみません。春にでも、もし時間が空けば是非遊びに来て下さい。

【前田陽一・町田・87/12】

■「憧憬」、いつもありがとうございます。今年は前陽サンの新作を2本ぐらいみたい！前年の雪辱を期すためにも。

【秋本鉄次・中野・88/1】

■憧憬NO.13、充実してましたね。「Let's 豪徳寺！」大好きだけど。あ、キネ旬の映評欄「母娘監禁・牝」も力がいっててよかった。私、まだ見てなくて。急いで見なくちゃ。元気でLet's 前田ファン！してね。

【内海陽子・足立・88/1】

■前田かんとくに電話で「出す方も出される方もすごいですね!!」って思わず言いました。こうなったらもうテレずにさいごまで「憧憬」でいきましょうよ。それからオクツケには創刊号の年月日も入れてほしいな。愛読者の1人としての希望。どんなことにでもずっとこだわっていくことって、すばらしいことだと思います。たった2冊でポシャってしまった映画書房は、とても恥づかしい。さいきん映画のことにもウトくなってしまうって……。前田かんとくの住む町田

は同じ沿線なので、ときどきおじゃまさせていただいています。せめて、そんな形でも前田さんと触れていたいと願っていますが…。

前田さんの新作に今年もまた出会えることを、憧憬が今年もまた出ること祈りつつ。

【野原 藍・世田谷・88/1】

■「前田映画ファンマガジン」ありがとうございます。うれしい。私達も、森崎東さん、前田陽一さん、瀬川昌治さんの作品が大々好きで、森崎さんのPart 2を今年中に、そして、来年には、前田さん、瀬川さんと考えていたのですが、新作が封切られるのを待っていても、どうもだめなようなのでどうしようかと思っていたのです。やっぱり今の作品について語らないと、はずみませんよねー。森崎さんの場合「ロケーション」以後ますます刺激的なので、いろいろお話をうかがっているのですが。

○斎藤信幸監督に、奈良に牧村さんという熱心なファンがいて、「春の夢」を映画化してほしいといっていましたと伝えとききました。

○前田さんの新作「Let'ー」は、撮影の宇田川満（まともな撮影ができない。やっぱり松竹のカメラマンでは坂本典隆さんと丸山恵司さんです）と役者とよべないような役者がどうしようもありません。

○野原藍さんはよく知っています。野原さんのだされている前田監督特集は、なんと「土佐の一本釣り」でエキストラ出演した時に監督本人よりもらった。（監督は、忘れていますが）。その時、監督は、試写会で高知に来たときにいろいろお話ししようということだったのですが、うまく時間があわず……残念。

【円尾敏郎・広島・88/1】

■前田監督のテレビ「いい話みつけ旅」が、4月3日から始まりました。全26回だそうです。ただ、今日、実は第3話見たのですが、監督は前田さんではなかったから、全部が前田作品というわけにはいかないらしくて、チョットそれは残念だという気がします。

第1話、2話を見た限りでは、名所案内やラストの有名レストランの紹介などをやり乍ら、ミニコミ誌に来た手紙によってドラマが作られて行くという構成になっているんですね。考えてみると欲張りなドラマなんだ。

とにかくテレビでも一本でも良いから多く撮ってもらいたいものだと思います

すが、やっぱり、映画を……。

【高橋 清・横浜・88/4】

■89年は、前田陽一監督で松坂慶子主演の大喜劇を撮って貰いたいなあ、というのが僕の初夢です。88年ベストワンは慶子の「女咲かせます」なのだ！

【秋本鉄次・中野・89/1】

■「L e t' 豪徳寺！」から約2年…今年こそ「憧憬」NO.14、もしくは新生「前田えいが ばらだいたす」1号が出そうな気配がありますね！—と、唐突な出だしで失礼をいたしました。昨年10月おわり頃、前田監督からお電話ちょうだいし、松竹テレビ室制作ながらも、来年から映画制作にかかるとの由（剣持亘と共同脚本、恐竜と子供のお話、サウジアラビアあたりでロケ予定…とのこと）伺って、「12月にはロケハン、2月ごろから撮入予定です」とのお言葉に今年こそは！と期待をこめて待つ望んでいる次第なのです。さらに12月18日、またお電話いただき、ロケハンが1月下旬からに延期され、只今銀座の松竹のそばのホテルで缶詰で、脚本書いているが、2、3日で終わるから会わんかとお誘いがありましたが、2、3日では終わらず結局お会いできませんでした。

正月から一方的な内容で申し訳ありませんが、とりあえず私の知る限りでの前田監督の近況報告まで、でした。 【池田千代・豊島・89/1】

■ロッキンガも終わって、本当に情けない88年でしたが、私には「リボルバー」が残りました。前田映画のために、T o s h i はまた今年もがんばらなくっちゃ、ね。

【内海陽子・足立・89/1】

■ことしこそ、そろそろ前田さんの新作を見たいものです。

【高橋 清・横浜・89/1】

■憧憬の次号が出ることを、私も願わずにはられません。

【野原 藍・世田谷・89/1】

■どういうわけか、サウジアラビアが出資する映画を作ることになりました。（子供向け）恐竜の子供（？）が出るということが条件になっています。さて、どうなりますやら。

【前田陽一・町田・89/1】

■前田監督には今年こそ撮っていただきたいものです。ボクの慶子様は「死の棘」で主演女優賞を大胆にも狙いますので、よろしく。

【秋本鉄次・府中・90/1】

■90年代の華やかな始まりに、前田さんはがんばってくれるでしょうか。今年もまた、牧村応援団は気がもめることでしょう。

【内海陽子・足立・90/1】

■年末に久々で前田監督にお会いしました。「ダイヤモンドダスト」のシナリオ執筆中とのこと。

【野原 藍・世田谷・90/1】

■前田さんに12/30に会いました。山川直人監督に「ダイヤモンドダスト」の脚本を書いたそうです。あとテレビで、ビートたけしで説教強盗のドラマを今年やるとのことです。

【高橋 清・横浜・90/1】

■昨年5月、これまで専属契約しておりました松竹にお願いし、フリーにさせていただきますましたが、今後ともよろしくお願い申し上げます。

なお、友人と企画制作会社(株)RAGSを設立し、私の連絡事務もそこで行っております。

御無沙汰しております。目下、日テレ(読売TV)の昭和犯罪史(説教強盗)の脚本を書きおわり(撮影は五月ごろ自分で)、どういふわけか山川直人という若い監督の脚本を頼まれて書いています。(ダイヤモンド・ダスト)(芥川賞作品)。

【前田陽一・町田・90/1】

■前田監督からは昨年の11月はじめに電話があり、サウジアラビアで作る予定の映画は、あちらの国と松竹がもめてるうちに猛暑の夏になってしまい1年後に延期とかで、今はTVの昭和犯罪史シリーズの一篇“説教強盗”の制作に意欲を見せておられました。果して本年こそは前田映画が見られるのだからか?と思案してたら、本日(1月5日)前田さんからの年賀状が届いてました。牧村さんの方にも届いたのではと思いますが、昨年5月に松竹をやめて新会社を設立されたとのこと、これは私には初耳でしたが前田映画の新しい門出を心からお祝いしたい、と考えております。牧村さんの「憧憬」最新号が今年こそ読めますように。

【池田千代・豊島・90/1】

■御所望により、〈帰ってきた太陽族〉の掲載号を送ります。以前、送ったと錯覚しておりました。他の「酩酊船」で欠落号があれば、遠慮なくお知らせ下さい。手許にまだ残っていますから。〈帰ってきた…〉は軽いエッセイにすぎ

ません。

やっと、ダイヤモンドダスト第一稿ができました。初めての「純文学」の脚本です。これは、この作品を企画したプロデューサーと別件（東條の企画）で会っていたとき、同作の監督（山川直人さん）は決まっているが、脚本家が決まっていないので「いっそ、前田さん書いてくれませんか」ということになって、引き受けたものです。山川さんに頑張ってもらって〈名作〉になることを期待しています。

「説教強盗」の撮影は役者の関係で初夏あたりになりそうです。その前にTBS系で「雪が降る」（馬場当脚本）、日本テレビ系で「小春日和」（金井美恵子原作、塩田千種脚本）を演出します。「雪が降る」には、田村コータロー君が初めてぼくの作品のチーフ助監督としてつきます。「小春日和」は、はじめ大林宣彦さんが岸恵子と相談して企画を考え、局もOKして、原作者金井さんに申し入れたところ、金井さんが何と「大林さんなんて映画監督として認められません」と言って断ったとかで、宙に浮いていたのですが、最近、金井さんから山根貞男氏をつ通じて、私に演出を依頼してきたものです。金井さんとは面識ありませんが、こうなるとやらないわけにはいかんでしょう。

と、というようなわけで、テレビの演出が続きますが思いはやはり映画にあり、いつやるかわからん企画などをシコシコ考えております。

四月には〈にっぽんばらだいす〉が、ようやくビデオになります。先日、ヴィスタ・サイズにトレミングする作業をやってきました。

渡辺文樹という監督に招かれて、先日、同氏作「島国根性」の上映会に行き、対談をやらされました。同作は、素人俳優ばかりを使っているが、それがみんな素晴らしい〈演技〉をやっていてちょっと面白い映画でした。家庭教師をやりながら、素人の演技者をコレクションしておいたとのこと。こんな貪慾は見習わねばなりません。

「オマケ」として、〈ダイヤモンドダスト〉の準備稿も同封しておきます。マジメな脚本ですぞ。宇宙論を読むのを趣味とする私の、子供っぽい死生観がちよっぴり入っています。

【前田陽一・町田・90/2】

■先日、テレビをみてたらTV中映画で、なんと「Let's 豪徳寺!」をやっ

てました。それで新聞みたら、監督・前田陽一でした。

【津田裕子・川西・90/3】

■お便りと「前田映画ファン・マガジン シネマ憧憬」をありがとうございます。読者の映画評や「キネ旬ロビイ」の拙文に注目していただけて嬉しく存じます。

「憧憬」NO.13掲載の牧村さんの文章をはじめ、高橋さん、池田さん、それに前田監督ご自身の文章、全部拝読しました。お三人の文章はいずれも同感、前田氏の内容については、小生が推察していたこととほぼ一致していました。

フリーとなった前田監督には、ぜひ「これこそ前田監督作品だ」と言える映画を撮ってほしいなと思います。

【市川栄一・秩父・90/3】

■「ダイヤモンドダスト」のシナリオは、ボクも読ませてもらいました。山川直人が監督するのは…。本は良い。死生観が明るく描かれているように思います。「小春日和」は仁科フキの役のオモシロさはいいけど、西田健のオカマは限界ですね。

【高橋 清・横浜・91/1】

■「憧憬」の“豪徳寺”の号で拙文をのせていただいた池田です。現在は姓が変り、海の向うに住んでおりますが、ひきつづき前田映画に望みをかける者としてよろしく願い申し上げます。（この年末、前田さんは鶴太郎主演の「説教強盗」をフジTVで撮影されてるようです。）

※結婚披露宴には前田さんにもご出席いただくことができ、暖かいスピーチまで頂戴いたしました。

【高橋千代・ドイツ・91/1】

■牧村さんの相変らぬ前田さんへのこだわりを改めて敬意を表してしまいます。「ダイヤモンドダスト」作りの資料(?)のひとつとして、私の友人のご主人(内科の医師)を紹介したというぐらいが今年の唯一の私と前田さんのつながりでした。

【野原 藍・世田谷・91/1】

■ウーン、今年もダメだった。ただ、〈ダイヤモンド〉は、私の監督でやれる可能性が出てきました。〈説教〉(テレビ)は一月にinします。こりずに映画にはアタックし続けます。

【前田陽一・町田・91/1】

■放映作品のお知らせ 昨年7月より当社は映像作品の制作をはじめ、既にビデオ2本、日本テレビ「追跡シリーズ」1本を作りましたが、このたび、次の

作品を完成しました。『男？女？Mrレディ20人の生活白書』（構成・演出前田陽一）3月16日夜7時より日本テレビ系（関西は読売テレビ系）で放映されます。ぜひ観てください。

尚、3月27日夜9時より当社の構成部門が係わったフジテレビ、『FNS1億2000万人のクイズ王決定戦！』が、放映されます。併せてご覧下さい。

【(株)ラグス・渋谷・91/3】

■私は、いろいろあって、現在は、ほとんど映画離れの生活をしています。映画ファンであることには変わりませんが……。

前田さんも、ご家族といっしょに暮らすようになってから、バッタリ電話も来なくなりました。

「憧憬」がまた発行されること（すなわち前田映画ができること）を願いながら、きっと、いつまでも前田さんにこだわりつづけるであろう牧村さんに敬意を表しながら、ペンをおきます。【野原 藍・世田谷・91/5】

■酩酊船六集やっと出来ましたので謹呈します。前田陽一への私信を無断借用いたしまして、失礼しています。（私的航行記六）

酩酊船一～四集、いくらか残部ありますので、お入り用ならお送りします。「憧憬」バックナンバーありましたら見せて下さい。

【竹内和夫・山崎・91/7】

■そろそろ前田さんの映画が見たいネ。しかし、山根監督の死はショックだった。

【高橋 清・横浜・92/1】

■日本は遠くなりけりーというと、ちょっと大仰で、日本の食べものも手に入るし朝日新聞の同日版も読めたりはするのですが…日本映画にはまるっきり疎くなるばかり。黒沢の「八月のラブソディ」ドイツ語吹替版がやっとかかった程度、です。ああ、前田さんの新作が観たい！何年も云い続けている様な気がします。テレビ作品でもいいから（この云い方は失礼ですね）ぜひ観たい。異国の空の下で切に願っております。日本映画の状況は如何ですか？

【高橋千代・ドイツ・92/1】

■「昭和の説教強盗」何とも不思議な出来ばえでしたね。前田さんの素晴らしい映画はもう出逢えないのでしょうか。【吉川隆夫・堺・92/1】

■今年も映画でお目にかかれず残念。漫画〈美味しんぼ〉映画化の話があり、一応、馬場当さんに脚本を依頼してはいるのですが、どう料理していいのか、今のところ全く自信なし。 【前田陽一・町田・92/1】

幻の名作『枇杷の木刀』を読んで —竹内和夫氏への手紙—

牧村利光

『酩酊船』第6集、ありがとうございました。『もうひとつの航海—私的航海記六』で拙文を取り上げていただき、恐縮しています。たとえ東の間であるにしろ『酩酊船』に乗船できるとは夢にも思っていなかっただけに、何とも幸福な気分になりました。

さらに感激したのは、〈復刻シリーズNO2〉で『枇杷の木刀』に出会えたことです。『にっぽんの喜劇えいがPART1 前田陽一篇』の三浦哲郎氏（前田監督から三浦氏の『白夜を旅する人々』を映画化したいという話を、数年前に奈良でお会いした際に漏れ聞きました。「原作権はくれないだろうけど」とのことでしたが……）の文章を読んで以来、僕にとって幻の小説であり続けてきた『枇杷の木刀』をまさか読めるとは！

どきどきしながらページを繰って一読二読、さすが前田さんだと思えました。今読んでも全く古びていず、前田陽一は常に早すぎた作家であり続けているとの思いを新たにします。〈枇杷の木刀〉に対する少年のナイーブで凜と張り詰めた想いの行方を軸に、途方もない逸脱に充ちた話が展開され、その虚実皮膜の間に少年達のココロが生き生きと脈動しています。一昨年評判になった篠田正浩監督『少年時代』が、同じ様な戦時中の田舎の少年達の権力闘争を描きながらも、その子供達が大人の雛型としてしか捉えられず、結局はノスタルジックで陳腐な友情物語に収斂していった凡庸さを思えば、『枇杷の木刀』の少年達が何とも魅力的なのは、子供がいずれ大人になる存在としてではなく、子供

は子供独自の異次元の世界に生きていることを、その残酷さをも含め鮮やかに描かれているからに違いありません。その存在に、教師は《「みんなは寄ってたかって先生をいじめるのだ。先生は淋しいんだ。……」》と恐慌さえきたします。このカリカチュアも前田さんのですが。

そして、前田映画ファンとしてはどうしても映画に引き付けて読んでしまうのですが、後年前田映画に展開される様々な要素の芽生えがあって、実に興味深くコーフンさせられました。紀州の山奥に殿様がいて、日本を再び武士の世の中にしようとするのに呼応して兵を挙げようというエモーションをリアルに生きること、少年達は面白くもない現実を突き抜けようとしみます。敢えて信じることによって自らを生き生きとさせようとするシチュエーションは、『虹をわたって』の王子様願望や『喜劇・日本列島震度0』の地震願望等に通じてくるのです。それはもちろん信じる者は救われるといった体のものではなく、《結局、紀州に殿様が居るとい話より、居ないとい話の方が面白くないからにすぎない》といった風に、敢えての部分に醒めた自己批評というかヤケクソじみた想いが含まれていて、どこかで現実からのしっぺ返しを覚悟しているフシがあります。そこに、危機感と期待感がないまぜになった前田ワールドが現出します。さらに、《もし紀州の殿様に加勢して再び日本が武士の世の中になれば、僕達を勿論一国一城の主にとりたてゝくれるにちがいない》という独立国指向？に、『スチャラカ社員』で大阪独立を、『喜劇・昨日の敵は今日も敵』で箱根独立（アロハオエと新選組が結びつく「ハワイ独立映画」という企画もありました）をスクリーンで画策してきた前田映画の大いなる野望？の出発点を見ます。ア然としつつ感激してしまったのは、〈行列〉が実に印象的に出てきたことです。前田映画のひとつの表現として行列のシーンが頻繁に出てくることを看破した熱烈なる前田ファンである高橋（旧姓・池田）千代氏の視点の鋭さに、ここで再び感嘆させられました。〈行列〉が内包する恍惚と不安のなかで、正史は狂気の世界に乱入してしまい、私が紀州勢を幻視するのが感動的なのは、まさに行列という直線運動が退廃へと向かうのを断ち切る瞬間に他ならないからだと思います。……この小説を読んで、前田映画の助監督だった南部英夫監督の言葉を思い出しました—《前田陽一というのは乱世の監督だと

いう気がする。時代が乱世ということではなく、そういうシチュエーションで映画を作った場合、非常にいきいきとした表現を獲得できる監督じゃないかと思うんですけどね》。

『ああ、ニシキを飾る』も実に面白く読みました。龍野市の市政40周年の記念講演を依頼された前田さんが、講演に至るまでの右往左住をまるで前田喜劇のように書いていて抱腹絶倒、時に私小説のような深淵を覗かせつつも、あくまでカラッと明るい前田タッチで楽しめました。〈……「なんでこないにもうかるねやろ」と義父が帳簿を見ながらつい口からもらしたのを憶えている〉から『にっぽんばらだす』を、〈……私の母と、私の子の、生涯に一度だけの出会いであった〉から『神様のくれた赤ん坊』を想起したりするのは、ファンの穿った見方に過ぎないでしょうが。

前之園明良氏の『薄暮ゲーム』も面白く読みました。まるでロードムービーのような乗りの快調さ！ 登場人物の名前がすべてカタカナで書かれることによって奇妙なニュアンスが生まれ、〈わたし〉にとって彼らは〈宇宙人〉？に他ならないのだなという気がしました。

期待した前田監督の『説教強盗』は、片岡鶴太郎がどうも違うという感じで、強盗が説教する転倒の面白さがいまひとつ弾けず、犯罪を通して描かれた昭和裏面史ダイジェスト版に終わってしまったのが残念です。むしろ、日本のニューハーフとパリのニューハーフを対面させるという企画のドキュメンタリー『男？女？Mrレディ20人の生活白書』に前田さんらしさを感じました。前田さん自らが登場して様々なニューハーフにインタビューして引き出されるのは、彼女達？がついに男として生き抜けなかった〈断念〉の深さです。それはそのまま生の痛みとして伝わってきて、胸を衝かれます。おばさんニューハーフの話から、戦時中のニュースフィルムや焼跡の浮浪児の姿が挿入され、口にグラスをくわえたままイッキ飲みしてヤケクソじみたサービス精神を発揮するおばさんニューハーフの生きざまに、生の悲哀が透かし見られて感動的です。いかにも前田さん向きの題材の『説教強盗』がいまひとつで、『男？女？Mrレディ』のようなキワモノめいた題材に前田さんの的なるものが噴出してくるあたり、

これもまた前田さんらしいと言うべきでしょうか。と、手紙の方もわがミニコミ同様に前田さんばかりになってしまい、失礼しました。

返事がひたすら遅くなってしまったうえで厚かましいのですが、『酩酊船』第1～3集の残部がありましたら、送っていただければ嬉しいのですが……。『憧憬』、残部のある分だけ同封します。御笑納ください。

蛇足ながら、僕の母方の祖母の出が山崎町門前で、勝手に一方的な親しみを感じたりしています。

【92/1】

■「憧憬」五冊、ありがたく拝受しました。その一部のよごれ具合からみて、誰かが大切に保存されていたのを奪い取ったのではないかとも思い、心苦しく、申しわけありません。彼は自分の映画については、私ども古い友達には、あまり多くを語りたがらないところもあるので、「憧憬」における彼の私信を読むのは楽しく、それを引き出したのはやはり編集長の腕前というべきでしょう。しかし、何とんでもこれだけの高熱のファンに囲まれている前田は幸せものだと思います。夏に町田で会ったとき、酩酊船6集についての牧村氏の返答がまだないことをちらっともらすと、「ロクなもん作ってないので、見放されたか」と笑いながらちょっとしょげていました。永年の懸案の説教強盗についてはいまだにビートたけしへの未練が残っているようですし、Meredyのパリ紀行の方に愛着をもっているらしいのはお説の通りです。いずれにしる「憧憬」N014が早く出せるよう、彼はがんばらねばなりません。

「枇杷の木刀」についての感想は、大変おもしろく拝読しました。小説の読み手からは到底出てこない数々の鋭い指摘だと思います。コピーして、彼へも送ってやってください。喜ぶと思います。「ああ、ニシキ…」も「文學界」の同人誌評で「別格ベスト5」になったりして好評でした。彼の「文章」のファンもちらほらと出てきて、ここにも「復活酩酊船」の一つの成果があって編集者の小生としても快く思っています。

酩酊船1～3集、お送りします。3集の前田の「大和…」や、拙文のあたりに「憧憬」との接点を発見されると思います。

【竹内和夫・山崎・92/1】

『美味しんぼ』は前田版『新しい天体』にならないか

—前田陽一監督への手紙—

牧村利光

御無沙汰しています。今年の正月に、田村浩太朗君から年末に前田監督達と飲んだとのことで連絡を貰いました。田村君に会うのも2年ぶり、テレビで前田組についたときのこと等、色々面白い話を聞くことができました。去年はついた映画が3本も流れたとのことで、少々腐っていましたが……。

『美味しんぼ』の映画化はどうなっているのでしょうか？『美味しんぼ』はテレビのアニメを何回か見た程度でさして興味はなかったのですが、まんがを読んでみると割に面白く、3冊ほど買ってしまいました。話は半可通のグルメをぎゃふんと言わせる「遠山の金さん」？並みのパターンの繰り返しで、主人公と父の関係も「巨人の星」並みのアナクロニズムでどうということはないのですが、そこに詰め込まれている食べものと料理に関する情報が面白いです。そういえば伊丹十三監督『たんぼぼ』も西部劇もどきのラーメン屋決闘を縦軸に、グルメのヤクザのエピソードを横軸に、そこに様々な食べものと料理の情報を詰め込んだスタイルでした。この映画の場合、それらが結局は母乳を飲む赤ん坊の陳腐なイメージに収斂してしまうのが物足りませんでした。（まあ、伊丹映画はどれもこれも、これ見よがしなだけで好きになれませんが）。犬猫の餌までグルメの時代ある飽食ニッポンに、悪意を込めた映画が出来ないものではないでしょうか。あるいは料理がサスペンスで、食べることがスペクタクルであるような……。『美味しんぼ』が前田版『新しい天体』（開高健）にならないかと、ふと思ったりするのです。かなり前に読んだので詳細は失念しましたが、〈新しい天体〉（料理）の発見を命じられた男が日本全国、世界各国の料理・珍味を食べ歩く話で、食べることがまさにスペクタクルと化されていて、その飽食の果

てに男が山の〈岩清水〉に最も鮮烈で豊潤な味わいを見いだすというパロッドクスが痛烈でした。

今年の1月に竹内和夫氏に半年遅れ（スイマセン）で、『酩酊船』第6集の御礼の返事を出し、まだ持っていなかった『酩酊船』第1～3集を送っていただきました。前之園明良氏の小説では、『蒼い顔』を偏愛します。上田栄子氏の小説では、『柿』が泣けました。前田さんの食べものに関するエッセイは、『浜っ子』に載ったのを含めて好きなのですが、『私的食べもの譚』は〈とんかつ〉〈カレーライス〉〈炒飯〉というわが外食三点セット？について書かれていることもあって、実に嬉しくかつ楽しく読みました。そして、『大和の古寺で月の出を待つ』に胸を衝かれました。

で、竹内氏の方から竹内氏に送った手紙をコピーして前田さんにも送ってみたらと言われ、調子に乗ってその手紙のコピーを同封します。御一読願えれば幸いです。……かくいう手紙も半年遅れ、スイマセン。と、ぐずぐずしていたら、『酩酊船』第7集が届きました。ありがとうございます。これから読ませていただきます。

では、前田映画の新作が一日も早く見れることを念じつつ、前田監督の御健闘を心より祈っています。

【92/7】

■前田さんの新作映画が銀幕に登場しなくなって、もう何年も経ちますね。今年こそ（できれば、わが松坂慶子様主演コメディを）撮って欲しい。何のかのいってもやっぱり慶子様！

【秋本鉄次・府中・93/1】

■前田さんは映画を撮れず、映画界はますます状況は悪くなります。しかし、逆にピンチの時こそ、前田さんの出番の時だと思います。

【高橋 清・横浜・93/1】

■日本映画のほとんど見られない異国暮らしがまだ続いておりますが、昨年夏ごろ突然、前田監督から「酩酊船」が届きたく感激、拝読いたしました。牧村さんの「憧憬」最新号も今年こそ拝見したいです。

【高橋千代・ドイツ・93/1】

■今年も「酩酊船」のよい読者になってください。近く「酩酊船青春記」という本を出します。 【竹内和夫・山崎・93/1】

■お手紙の返事、出せずにごめんなさい。ドイツにいる池田千代さんに、コピーして送ったら喜んでいました。竹内和夫が、あなたの批評文をととても誉めておりました。「深い」と。

情況悪し。しかし、あきらめずにあがくつもりです。そのうち、手紙でまた。

【前田陽一・町田・93/1】

『酩酊船』第7集と
『孤独な水鳥』を読んで
—竹内和夫氏への手紙—

牧村利光

『酩酊船』第7集、拝受。ありがとうございました。またまた返事が遅くなってしまい、申し訳ありません。

前田監督の『私の稚俗の宇宙観』は、前田監督初の純文学のシナリオ化『ダイヤモンドダスト』のテキストとして興味深く読みました。シナリオ『ダイヤモンドダスト』は、岡晴夫とモーツァルトが何の違和感もなく共存してしまうあたりに前田タッチを感じ、原作にはない宇宙論の導入によって生と死がパノラマ的に見えてくるのが圧巻でした。前田監督自身が撮る可能性が出てきたとき、「もう少し遊びの要素を入れなければね」と仰有っていましたが、未映画化で残念です。

それにしても『群島をめぐる一私的航行記(七)』は、実に面白くて夢中になって読んでしまいました。〈酩酊船〉の迷走ぶり？に心浮き立ち、挑発されるのです。とくに居酒屋をめぐるエピソードが迷宮を彷徨っていくかのようなスリリングさがあって、ドキドキしました。僕も竹内さんの飲み屋で一杯やりたくなりましたが……。

〈復刻シリーズN03〉、竹内さんの『孤独な水鳥』も面白く読みました。白のイメージをめぐる確執の物語。市の清掃課（パッカー車なき時代、ごみ収集はかくのごとく行われていましたか）に勤めることになる僕のあたらしいランニングとトレパンの白さは、その錯誤によって屈辱に塗れるしかありません。僕は公園の羽毛を汚した片足の白鳥に自らを見、その擬装によって辛うじて現実に対峙しようとしめます。そこにあるのは本来の自分の姿ではないのだという、ギリギリのところでの思い込みによって……。しかし、その思い込みも僕と女が夜の公園で汚れた白鳥にパンのカケラを投げ与えるとき、無残に打ち砕かれます。大きな水音と共にパンのカケラがかき消える時、僕の擬装が裏返し of 傲慢さに過ぎないことを、僕は自らの内なる貪欲さを正視できずに戦えます。

それゆえ、僕と女は朝見五郎の大きな歯並みの真っ白さの人工的なしたたかさに憧れずにはいられないのだと思います。そして、その憧れが強ければ強いほど、僕と女はより激しく汚れた片足の白鳥を『みにくいアヒル』を意識せずにはいられないのでしょう。と、同時にその意識が何処かで朝見の歯の白さの虚構性を見抜いてもいるのです。憧れるからこそ憎まずにはいられない……僕と女と朝見のトライアングル・ラブが生み出す磁場に、アンビバレンスな想いが渦巻きます。

僕が汚れた白鳥を洗おうと思いつくのは、まさにその磁場で捉えられている鬱屈した居たたまれなさ（朝見の前で女が僕にみせたことのない美しい歯をみせて笑い、朝見の「跳べ！」と叫ぶ声に水面が鋼のように僕の背を打つ）から、自らを解き放とうとする決意に他ならないのだという気がします。自らの内部にむかって清冽なしぶきをあてることによって僕は擬装をかなぐり捨て、在るがままの白（生）のイメージに向かって飛び立つのです。その時、この小説は鮮烈で瑞々しい印象を残します。……どうも、要領を得ない感想になってしまいました。

と、ほぼ1年遅れ（スイマセン）の返事を書いていたら、『酩酊船青春記』が届きました。素敵なお本を有難うございます。これから楽しみに、じっくり読ませていただきます。まずは御礼まで。

【93/6】

■先日、ヨコハマ映画祭が、ヨコハマの会から表彰されたこと祝うパーティに参加して、前田さんの元気な姿を拝見しました。早く映画を撮って欲しいなあ。

【秋本鉄次・府中・94/1】

■前田監督、今年で監督になって三十年目とのこと。是非、新作が見てみたいです。

【高橋 清・横浜・94/1】

■なにぶん3年半ぶりの日本で、日本映画にもだいぶブランクができてしまいましたが、再び前田映画の新作を熱望する旗振り役に加えていただければ幸いです。

【高橋千代・ドイツ・94/1】

■ことしの風は どこ吹く風 どうかよい風が 吹きますように
私に定年はありませぬ、しかし、そろそろ始動したく思います。

【前田陽一・町田・94/1】

■帰国して早や3週間、やっと生活も落ちついてきましたので、そろそろ見逃していた映画のビデオを借りて見まろうかと考えています。何より前田さん監督のドラマを見たいところですが…。

【高橋千代・横浜・94/1】

■と、言うわけで昨年は入院という楽しい初体験をしてしまいました。

年末年初と仕事(TV)で、御挨拶が遅れました。二月六日(6チャンネル)月曜スペシャル夜九時より、拙作放映。どうということない内容だが。

【前田陽一・町田・95/1】

■昨秋、箱根の小湧園に行く機会があり、「喜劇・昨日の敵は今日も敵」を思い出しつつ一人にんまり楽しんでおりました。たしかに独立してもいいくらいの広さはありますね～。

【高橋千代・横浜・96/1】

■前田映画ファンとしては快作を待ちますが、なかなか条件が整わぬようですね。今年いいことがありますよう。

【竹内和夫・山崎・96/1】

■御無沙汰。今年こそと思って幾星霜、仲々、突破口が開けません。ま、もうちょっと頑張ります。

競馬に夢中になりすぎぬよう。 【前田陽一・町田・96/1】

▶僕はここ数年、映画より競馬に夢中になっていて、前田監督から電話でも何回か「あんまり競馬にいったらあかんで」と言われた。前田監督は昔、競馬で修羅場?を潜り抜けたみたいなどころがあるので、のめり込みやすい僕の性質を

見抜いて、心配して下さったのだらうと思う。

【TOSHI】

■ごぶさたしております。以前、貴誌「憧憬」にも掲載していただいた高橋（旧姓・池田）でございます。

突然ですが、しばらく前、10月19日（土）横浜の黄金町にて、（フランキー堺特集の一つとして）「喜劇・日本列島震度0」「喜劇・あゝ軍歌」を続けて観る機会がありまして、前田監督もいらして久々にこの2本を観た次第で、あとから元・キネマ旬報社の吉田成己氏も合流して、居酒屋で一献とあいになりました。少ないのですが、その折の写真を同封させていただきます。シケモク片手にポーズをとる監督も妙にきまっでいて、相かわらず洒落っ気の多い人で嬉しかったです。

ただ、もう映画を撮る気はほとんど無くなっていたのが寂しかったです。

【高橋千代・横浜・96/11】

■12/25に前田監督に会いました。何年かぶりかで、すごくイイ夜でした。自宅でスキヤキをごちそうになりました。その夜は、牧村さんの話も出て、涙が出そうになりました。

また、別の手紙にくわしく書きます。【高橋 清・横浜・97/1】

■まだまだ未見の前田映画がたくさんある未熟者ですが、本年もどうぞよろしく。しかし、牧村さんの「憧憬」はもう次号が出ないのだろうか……。

【高橋千代・横浜・97/1】

■秋に前田の新居を見てきました。元気だったので安心しました。

【竹内和夫・山崎・97/1】

■今年は暮れから、酩酊船のエッセイの原稿に追われ、賀状が遅れました。今度は沢山書いています。これらを集めて本にしたいのです。むろん、あなたや「憧憬」のことも書くつもりです。

高橋千代さんの写した写真ひどいものです。正視に耐えず破りました。あんなものぼくの死後に発表したら、化けて出るよ。これ約束。

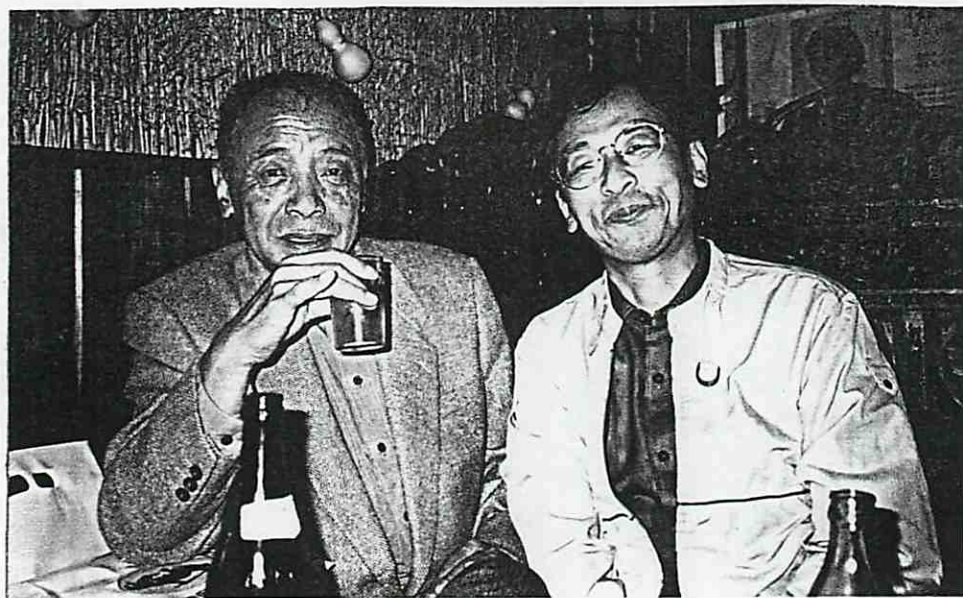
今年は、映画をふくめ何か動きそうです。

【前田陽一・文京・97/1】

▶前田監督になら化けて出てきてもらってもいっこうにかまわないというか、

化けて出てきてほしい? ぐらいのもんだけど、ここは仁義に反するわけにはいかないの、もちろん高橋千代さんにもらった問題の写真は発表しません(しかし今思えば、この時期の前田監督の「僕の死後……」という言葉には胸が痛む)。そのかわりといっはなんですが、同じく高橋千代さんにもらった写真で問題ない? 方の前田監督と吉田成己氏のツーショットを掲載します。

【TOSHI】



前田陽一監督とのクリスマスの夜

高橋 清

昨年の12月25日のクリスマスの日、アルゴピクチャーズの細谷氏と、町田から本郷の方へ引っ越しされた前田陽一監督の新居におじゃましました。

地下鉄の千駄木という駅を降り、道幅の広い、なぜか懐かしく、初めて来たのに、前に来たことのあるような商店街を、昔このあたりに住んでいたことのある細谷氏の案内で、僕らは前田監督の家を目指した。実は、細谷氏も前田監

督の新居に行くのははじめてでファックスの地図を頼りに、僕らはさながらあの「神様のくれた赤ん坊」の桃井かおりのように、こっちは“城のある風景”ではなく、“前田監督のいる家”を捜しはじめた。

体が少し汗ばんできたころ、やっと、前田監督の新居を見つけた。その家は、商店街から少し離れた、静かなたたずまいの中にあった。初めて奥様におめにかかり、二階に案内された。二階に上がると、前田監督が変わらぬ笑顔で、僕らを迎えてくれた。二、三年ぶりの対面である。

お酒をごちそうになり、すき焼きをごちそうになり、さらに、前田監督の話をごちそうになる。僕は酒のせいとはいえ、いくつか、しくじってしまった。まずは失礼にも、「『Let's 豪徳寺!』が、前田監督の遺作になったらイヤですよ」と言ってしまう、前田監督を怒らしてしまった。けして、悪い意味で言った訳ではないが、反省している。

また、「神様のくれた赤ん坊」がテレビドラマになった時（僕は見ていない）に、母親役を誰がやったかという話になり、前田監督の“最近死んだ、劇団をやっていた女優”というヒントで、僕は初井言栄と答え、前田監督もその場では納得してくれたのですが、家に帰ってから考えてみますと、どうも初井言栄（まだ生きてます）ではなく、賀原夏子（テレビの「ケンちゃん」シリーズのオバアちゃんや、成瀬の映画などにも出てる女優）だと分かりました。一つ、嘘をついてしまいました。

「Vシネマはやらないんですか？」と、細谷氏が、前田監督に訊く。前田監督が身ぶりつきで、前にVシネマでやろうとしたある企画の話をしてくれた。

それはこんな話だ。ある公園のベンチに虚無僧が座っている。足元にボールが転がってくる。女の子が拾いにくる。虚無僧がボールを拾い、女の子に渡す。女の子は「ありがとう」と言って、立ち去る。虚無僧が深編み笠を取る。と、長い黒髪の女（その当時、岩下志麻をイメージしたそうです）が、現われる。そこに、ファンファーレが鳴り響いてくる。カメラが引いて行くと、そこが、大井競馬場の中にある公園だということが分かる。これが、ファースト・シーンです。

志麻はかって、金持ちの妾をやっていた。そして、旦那に出来た子供を墮胎

させられた過去があった。子供を墮胎している同じ頃、北海道の牧場で、旦那の持ち馬が子供を産む。志麻は、その子馬に、自分が子供につけようとした名を旦那に無理を言ってつけてもらう。

結局、志麻は旦那と別れてしまう。子馬もどこかへ売られてしまう。何年かたち、志麻は子馬のことが気になって捜しはじめる。ある人が、似たような馬（志麻は子馬の写真を持っていた）を地方の公営競馬場で見たと教えてくれる。志麻はすぐに行くが、それは違う馬だった。こうして、志麻の子馬を捜す旅がはじまる。（“城”とか、なにか自分の原風景のメタファーがこの場合“馬”なんでしょうね）。

この馬捜しがメイン・ストーリーで、それに競馬場で知り合う「タイヤキ同盟」ならぬ「馬キチ同盟」の仲間の話がからむ。一つのエピソードとして、北九州のヤクザの息子が東大受験に失敗したのに、親父に嘘をつき、ニセ東大生になり、志麻がヤクザにからまれた時に、親父の力で助けてやるというのがある。

ラストは、やっと見つけた馬が出るレースに、人気薄にもかかわらず、志麻は全財産を賭ける。レースがはじまり、志麻は死んだ子供の名を叫びつづける。さて、どうなるか？ このシーンは、たぶんいくつかのカットバックがある。墮胎している病室、北海道の牧場で産まれる馬、このレースの最後に志麻は自分の過去から解放されるんだね、きっと。（もっと詳しく話してくれたと思うのですが、おおむねこんな話だと思うのですが…）。

お酒がグイグイと体の中に入って行く。細谷氏がさらに、前田監督に「『唐獅子株式会社』をVシネマでやれませんか」と、提案する。前田監督も、その話にのり、前に書いたシナリオ（高田純氏、荒井晴彦氏と書いたやつ）を細谷氏に渡すということになり、このプロジェクトは実現に向けて動き出した。（うまく当てて、シリーズ化みたいになったらいいのになぁ）Vシネマでも前田作品が見たい。

僕は、志村喬のやった「男ありて」（脚本・菊島隆三、監督・丸山誠治）のリメイクは出来ませんかと勝手なことを言いましたが、前田監督は、いつかこの映画を見ると言ってくれました。「大追跡」でやった“オカマさんのパリ旅行”のドキュメント、僕も良かったと言っておきました。

酔いが体中にまわって行き、うれしさが泡のように体の中からプカプカと浮いてくるようです。

前田監督が言います。「今まで生きてきた中で、うれしいことが二つあった。一つは『にっぽんばらだيس』を撮れたこと。もう一つは牧村君から『憧憬』が送られてきたことだ」と。イヤ、前田監督は、「にっぽんばらだيس」を撮れたことと同じぐらいに、「憧憬」が送られてきたことはうれしかったと言いました。僕が目からなぜか涙が出てきました。前田監督はさらに言います。「牧村君はオレのことを一番、分かってくれている」と。

僕が思うに、前田監督の中に、“日本一のファン”を持った監督だという幸福的な自負があるんじゃないでしょうか。うがった見方かも知れませんが、牧村さんの存在はある面で、前田監督の一つの支えのようなものになっているような気がします。

でも、そこまで言ってくれる前田陽一という人間に、自分のことではなく、牧村さんのことだから、尚さら同じ前田映画ファンとして、うれしくてうれしくて、「どうもありがとうございます」と握手をしてもらいました。前田監督の“熱”が僕の体に伝わってきました。本当はここに、牧村さんが居てくれたら一番良かったのかも知れませんが、その夜のことが少しでも牧村さんに伝わればと、こんな支離滅裂な手紙を、少し時間がたった今書いてるしだいです。

最後に、前田監督が言ったような言い方でしめさせてもらえば、「僕の44年の人生のなかで、あの夜は一番あったかくて、一番うれしくて、一番忘れられないクリスマスになりました」。そういう機会を作ってくれた細谷氏にも感謝しています。

では、また前田映画の新作について喋れる日を願いながらペンを置きます。

【97/1】

■前略 とつぜん妙な雑誌など送りつけて、まことに失礼いたします。

「酩酊船」は、私がかって兵庫県の片隅の田舎町の高校在学中になじみとなったブンガク少年少女たちで、卒業後、ほんの数年間、発行していた同人雑誌の誌名です。

十年ほど前、シャレで〈廃刊三十周年記念号〉と称して、昔の仲間と一号だ

けの予定で発行したのですが、そのとき各地に散った仲間たちが集まり、雑誌をサカナにいっぱい飲んだ楽しさが忘れられず、つつい年一回ほど発行することになってしまいました。むろん、みんなかつての文学的意欲や野心など、とくに消え失せておりますが、旧交を温めるための拠りどころとして、ずるずる続いてしております。ページ数に応じて、原稿料を「出す」という困った雑誌でもあります。

いつもなまけて、小文でお茶を濁していた私に、今回は多大のノルマが課されました。苦しまぎれに、正月休みを利用して駄文を書き散らしました。それでも足りずに、発表ずみの文章まで編集人に送って、あえぎあえぎ、ノルマをはたしました。そして、今更ながら、文章というものの難しさを痛感させられております。

ただ、「わが聖なる島」は、はじめは短いものにするつもりが、書いているうちに遊び心が消え失せ、つつい本気の部分も出でて、長くなってしまいました。私的な関心とは別に、過ぐる太平洋戦争の硫黄島戦のことが、今ではすっかり風化して人々の記憶から去りつつあるようなので、なにか概括的な形で、まとめておきたいという気持ちも生じたのです。そのため、諸家の労作から、無断であれこれ引用などさせていただきました。小部数の仲間雑誌ということで、諸家にはお目こぼし願いたく存じます。

毎号、ドサリと何十冊も送ってきて、処置に困るのですが、今号は、めずらしく私の駄文が多く掲載されることになり、旧知のみなさんには近況報告がてら、未知の方には何らかの謝意をこめて、恥ずかしながらお送りする次第です。お読み捨て下されば幸いです。誤植が多く目につきますが、素人雑誌ということでお許し下さい。

「アルゴピクチャーズ」という会社で、ビデオ（スーパー16mmフィルム、単館上映も）で、「唐獅子株式会社」をやることが決まりました。しかし、仲々難しい。

【前田陽一・文京・97/2】

『エッセイごっこ』を読んで —前田陽一監督への手紙—

牧村利光

『酩酊船』第11集、拝受。返事が遅くなってしまい申し訳ありません。前田監督のエッセイの面白さは、すでに『にっぽんの喜劇えいがPART1 前田陽一篇』で実証済みですが、今回久しぶりに質・量ともに充実した前田エッセイを堪能することができました。

力作『わが聖なる島—硫黄島巡行記』は秀れたドキュメンタリー映画を見るが如くのスリリングさで、前田ファンとしては『進め！ジャガーズ・敵前上陸』の南道郎や『喜劇・あゝ軍歌』の北林谷栄が見え隠れしつつ、ビビッドに生き始めるのが圧巻でした。

『ブンガク奔流時代』の初めてのエッセイ〈ユーモアについて〉は、そのまま見事な前田映画論として読めて、処女作にはその作家のすべての萌芽があるのだなと改めて感じました。『にっぽんばらだいす』で香山美子が水揚げされた後、「わたし、おなかすいちゃた…」と呟いて娼婦たちの爆笑に包まれ胴上げされるシーンを、俯瞰で捉えた前田監督の眼ざしが閃きました。

『ああ、龍野』の城と路地の風景から『神様のくれた赤ん坊』を想い、『イタリアでの黒沢明監督』で追記された部分に『虹をわたって』の後日談のシーンが痛烈に蘇りました。ダルマ船の連中が天地真理の家を尋ね、父親の有島一郎に拒絶される場面です。あの映画が天皇論？であったのなら、映画界の天皇・黒沢監督に対するいたずらは、前田監督が自らのエイガ生きてしまう瞬間であり、その無頼!?!にア然としつつも、過激なる反骨精神を前田ファンはやはり愛してしまうわけです。なんのこっちゃ。

あと、最近読んだ前田エッセイでは『映画芸術』誌の〈渥美清追悼〉が、役者・渥美清が抱えていたであろうジレンマへの共感をもって書かれていて、実にまっとうで素晴らしかった。というのも、故・渥美清に捧げられたはずの山

田洋次監督『虹をつかむ男』が安易に映画をなぞるだけの、山田監督の映画論の脆弱さを露呈した出来損ないの映画オタク作品になっていたからです。こんな映画を捧げられても、あの世の渥美さんは戸惑い苦笑するしかないと思うし、なにより浮かばれまい。「それをやっちゃあおしまいよ」てなもんです。それにしても、かつて『苦しまぎれの喜劇』で前田監督が語っておられた『ああ活動大写真』をこそ見たかった。

竹内和夫氏『岬の向こう一続・航行記』は、サンテラーノ号と共に快走あるいは怪走を続け、楽しく頼もしい。今回は特に、阪神大震災に関する記述が衝撃的でした。「倒壊した木造家屋の陰に緑の樹がのぞいて、つややかな夏みかんが実っていた。」—その向こうに生と死が明滅して、胸を衝かれました。

それでは、『唐獅子株式会社』を心待ちに一。 【97/5】

■前田陽一ファンの皆様へ 新緑の侯 皆様いかがお過ごしでしょうか

日本映画界も活気があるのかなのか、さっぱり分からない今日このごろですが… さて、『つぼんばらだす』『喜劇・あゝ軍歌』など数々の作品を撮られてきたわれらが前田陽一監督ですが、劇場のスクリーンからは87年の『L e t ' s 豪徳寺!』以来、かなりの間遠ざかっております。世渡り下手で筋を通す前田監督のこと。 きっと思うところがあったのでしょう。

ところが最近、嬉しいことに、監督の周辺が騒がしくなっているようです。新作映画も動き出している気配ですし、Vシネマで喜劇を撮られるとか… ピンチにめっぽう強く、チャンスにからきし、もろい前田監督ですが、なんとか映画を成功させたいと思うのは前田シンパとしては当然のこと… そこでこの際、このチャンスを活かしていただくためにも 前田陽一ファンが久々に集結して、激励の意味もこめまして「前田監督をダシとして、映画大好きどもが、映画の話を大いに語ろう会」を開催することにいたしました。

居酒屋でワイワイやるのも宜しいのですが、ちょっと趣向を凝らしまして、東京の下町情緒あふれる、入谷にある（畳み敷きの）公民館を会場にしました。お酒飲みにも、下戸の方にも楽しんでいただけるように、東京名物の数々をご用意しております。

また、前田作品の名場面・珍場面を集めた特製ビデオも上映する予定です。当日は、映画評論家の山根貞男氏を特別ゲストとしてお招きすることが決定いたしました。【古林洋二・足立・97/5】

■さて、例の「前田監督をダシとして、映画の話を大いに語ろう会」に行ってきました。盛況な集まりでした。ビデオプロジェクターで、過去の前田作品やテレビ、はては揖保乃糸のCFまで、前田監督の解説つきで見ました。佐藤利明さんの努力に頭が下がる思いです。元・入谷映画村の古林洋二さんや映画村の人たちの、あたたかいもてなしに胸が一杯になりました。みんな前田映画が好きで、前田さんが好きな人たちが集まりました。そして、前田さんに映画を撮ってもらいたいと思っているのです。

いよいよ来年、「憧憬」が出せるかもしれません。名古屋発の前田映画が出来そうです。前田さんはすごく元気で、陽気でした。来年、前田陽一は“ブレイク”すると思います。【高橋 清・横浜・97/6】

■猛暑の毎日ですが、お元気でお過ごしのことと思います。

下記の私の近作がテレビ朝日、関西では朝日放送で放映される予定です。高木彬光の原作を現代風に大幅に改変したサスペンスものです。おひまなら残暑しのぎにご笑覧ください。

●土曜ワイド劇場『大東京四谷怪談』 監督 前田陽一 脚本 吉田剛

出演 高島礼子 鶴見辰吾 武田久美子 平幹二郎 ベンガル 山口美也子

●日時 八月三十日（土曜日）夜九時から二時間

ぼくらしい作品ではありませんが。

「唐獅子」原作者がうるさく、脚本で難渋しています。

【前田陽一・文京・97/8】

■今夏、前田カントクともゆかりの深かった横浜より引っ越し、東京に出戻りました。前田カントクの周辺がいろいろにぎわってきて嬉しいですね。

【高橋千代・中野・97/9】

■渡さんの映画が、続けて見れてハッピー。前田監督は、どうしてられるのですか？

【津田裕子・大阪・97/12】

■今年はいよいよVシネマだけど、前田監督が「唐獅子株式会社」を撮るので
たのしみです。 【高橋 清・横浜・98/1】

■昨年五月、入谷映画村の人々主催の集まりで久々に前田映画の空気を堪能し
ました。牧村さんにもお目にかかりたかったのですが…。

【高橋千代・中野・98/1】

■「唐獅子株式会社」が、四月からinしそうです。おとなしい脚本ですが、
原作者、主役の赤井は乗っているそうです。企画中の「ナゴヤニアン
の逆襲」は、キムタクができれば東海テレビが金を出すとか。ま、無理でしょうね。

【前田陽一・文京・98/1】

■前田陽一さんの突然の訃報、びっくりしています。

知人の北里宇一郎（脚本家）さんから、当日の状況を聞いてさらにびっくり
…、がんだったとは…。

P. S. 「憧憬」11・12・13号を読んでは、前田さんを偲んでいます。

【新沼千春・江東・98/5】

■冠省 前田陽一君が亡くなってから一か月が経ちました。彼が私たちに残し
たものの大きさをあらためて偲びながら、遺稿の整理などを行っています。

『酩酊船』第十三集は、彼の追悼をもって全頁を埋めたいと考えています。

紙数は問いませんので、前田陽一を偲ぶ文章を寄せて下さい。原稿締め切り
は、六月末日とします。 酩酊船編集室

葬送の折はいろいろありがとう。車中で言ったこと、「『憧憬』の映画監督」
として、書いてもらえればと思います。「ダイヤモンドダスト」の脚本は手に
入り、別冊の形で折り込む予定です。 【竹内和夫・山崎・98/6】

■前田陽一監督の突然の訃報、まったく残念です。ようやく11年ぶりに新作が
見られると思っていましたのに。（南部英夫が仕上げた「新唐獅子一」どんな
出来か早くみたいです）。 【土田啓三・吹田・98/8】

■前田監督が亡くなって、3か月近くになるというのに、今だにどこかに居る

ような気がしてしょうがありません。

先日(7/12)に、地元・横浜で「前田陽一監督のヨコハマ時代を語る会」というのをやり、出席しました。

元・キネ旬の吉田さんの撮ったビデオ(前田監督が、吉良邸から泉岳寺まで歩く姿を撮ったビデオです)と、「進め! ジャガーズ・敵前上陸」をビデオ上映しました。麦座のメンバーや、前田監督の奥さんや、満友さんや南部監督と見て、上映終了後、ビールなど飲みながら、それぞれの前田さんの思い出を話し合いました。

僕もはじめて会った高橋千代さんと、前田映画について、二次会、三次会までも喋り合いました。

南部監督と話していて、なぜか涙がそうになり、「新・唐獅子株式会社」を完成させてくれてありがとうございますと言いました。プロデューサーの細谷氏も来ていて、湯布院映画祭で「新・唐獅子株式会社」を上映すると教えてくれました。久しぶりに前田映画のことを喋れて、若い前田ファンにも会い、うれしかったのですが、一人帰り道、前田さんがいなくなったことの寂しさで胸がいっぱいになりました。

【高橋 清・横浜・98/8】

■盆明けの週に短い夏休みをとって、都立中央図書館へ行き、大宅壮一文庫目録を元に前田さんに関わる雑誌原稿を探してみましたが、あんまり数は出てきませんでした。こんなに少ない筈はないと思うのですが……後日コピーを送ります。松竹大谷図書館は改装中で休館でした。

新宿のレンタルビデオ屋の前田さんコーナーで「三億円をつかまえろ」「猪突猛進せよ」「命のお値段」etc、借りてぼんやりその世界に浸り休みが過ぎました。

【高橋千代・中野・98/8】

『酩酊船』第13集 特集 追想の前田陽一

★前田陽一の生と死が、花に嵐となって怒涛の如く押し寄せる。前田さん縁の人々のプリズムを通して、前田さんは様々な表情をみせ、放射線状の光となって降りそそぐ。圧倒され感動すればするほどに、前田さんの〈不在〉が理不尽なことに思えてくる。前田ファン必読の書！

★前田さんの遺稿『THE LAST DAYS』所載。これは鮮烈なまでの、前田さんの〈生きる〉だ。 【TOSHI】

▶問い合わせ先

〒671-2577兵庫県宍粟郡山崎町山崎440 竹内和夫方・酩酊船同人会

TEL 0790 (62) 2178

※特別定価1,500円 送料240円

編集後記

★本誌の最新号（といっても11年ぶりですが…）が、こんな形になるとは夢にも思いませんでした。無念です。

5月3日の昼過ぎ、映画評論家・佐藤利明氏から電話をいただいた。佐藤氏とは全く面識はなかったが、前田監督が『酩酊船』に書かれたエッセイや昨年5月に入谷で開かれた『前田監督をダシとして、映画大好きどもが、映画の話を大いに語ろう会』の主催者として、お名前と熱心な前田ファンであることは存じあげていた。《4月に『唐獅子株式会社』が、inしそうです》と前田監督の賀状にあったから、そのことについて何か教えてもらえるのだろうと電話に出てみると、いきなり「前田監督が今朝方、亡くなられた」と言われる。あまりの突然のことに「えっ」と絶句するしかなく、言われる言葉はコトバとしては分かるが、その意味を理解することができない。何故、前田監督が今亡くな

らなければならぬのかと茫然となる。佐藤氏は、その2日前に『新・唐獅子株式会社』の撮影現場に陣中見舞に行ってきたところだという。

夕方には、僕の住む桜井市出身のフリーの映画助監督・田村浩太郎君も前田監督の訃報の電話をくれた。田村君は、前田監督の傑作TVドラマ『小春日和』（90年・日本テレビ）に〈演出助手〉でついた。（その当時、前田監督と電話で話したとき、前田監督は「田村君もなかなかの助監督の顔になってましたよ。監督になれたらいいんだけどね」と言われ、僕が「田村君は『いい助監督は、いい監督になれない』と言ってましたよ」と言うと、大笑いされてました）。

夜には、前田監督の古くからの友人の作家・竹内和夫氏からも電話をいただき、前田監督が亡くなられた時の状況をさらに詳しく、通夜・葬儀の日時と場所を教えていただく。そして、竹内氏の「できれば行ってやってほしい」との言葉に意を決して前田監督の通夜・葬儀に参列することにする。

★5月6日、新幹線で姫路から前田監督のもとに向かわれる竹内氏に、京都から同行させていただいた。竹内氏とは手紙のやりとりは何度かあったが、もちろん初対面。目印に『酩酊船』を持っていく。車中で竹内氏にも言ったのだが、この11年、僕が前田映画への期待を削がれずに掻き立ててくれたのは、『酩酊船』で前田監督の数々のエッセイを読むことができたからだと思う。

東京駅で竹内氏が待ち合わせをされていた『酩酊船』同人の作家・上田栄子氏、前田監督の龍野高校時代の友人・松本氏らとともに、前田監督の通夜・葬儀が行われる谷中・玉林寺へ向かう。営団地下鉄・根津駅で下車して、車の行き交う道路の両脇に小さな商店が軒を連ねた緩やか坂道を上って行った先に玉林寺はあった。下町の喧噪が嘘のような静寂さに包まれた、端正な佇まいのお寺であった。

通夜・葬儀では、前田映画と本誌を通してお名前だけは存じていた吉田成己氏、佐藤利明氏、細谷隆広氏（『新・唐獅子株式会社』のプロデューサー）、佐藤正氏（前田映画では『土佐の一本釣り』『つっぱり清水港』をプロデュース。「名前は出なかったが、『神様のくれた赤ん坊』も殆ど自分がやった」とのこと）らと、初対面。皆さん、それぞれ魅力的な方々で、さすが前田ファンと得心がいく。高橋清氏は仕事で通夜には行けないとのことだったのだが、駅

けつけてこられ、しかし高橋さんにも17年前に一度会ったきりでお互い顔が判らない。通夜の席で、なんとか捜し当ててもらった。

通夜で、細谷氏が『新・唐獅子一』の脚本を貸してくださり、ホテルで読んだ。前の『唐獅子一』脚本のようなスラップスティックは全く影を潜めているが、暴力団対策法以後のヤクザの世界をカリカチュアして、ヤクザ狩りを縦軸に過去のプロ野球賭博事件を横軸に、それなりにスリリングな展開で面白く読んだ。別紙で「揖保乃糸」のCMシーンが挟み込まれていて、細谷プロデューサーによると予算が足りなかったときのためとのことで、いかにも前田映画らしくて？可笑しかった。

葬儀委員長の脚本家・永原秀一氏の御挨拶によると、葬儀の当日も前田組は『新・唐獅子一』の撮影を続行中とのことだった。

★一昨年5月頃、前田監督から久しぶりに電話をいただいた。このときはなぜか、映画の話はほとんどしなかった。僕の息子が電話をとったことから、子供の話になり、前田監督の御息子が僕の息子より二つ年上ということもあって「これからもいろいろ相談に乗りますよ」と言ってくださり、心強く思っていたのだが。そして「若い人の本はめったに読まないが」と、三田誠広『パパは塾長』という本を推薦してくださった。（本屋で何度か捜したが、手にすることができないまま現在に至ってしまったが）。

その時の電話で、前田監督が「あなたの手紙は、すべてまとめてとってあるんだよ」みたいなことを言われるので、前田監督何で急にそんなことを言われるのかと一瞬訝しく思ったものの、こちらは単純に嬉しいから「ありがとうございます」と応じたのだが。その2年前に前田監督が大腸がんの手術をされたことはエッセイ『ああ入院』（『酩酊船』第9集）を読んで知っていたから、「お身体のほうはどうですか」とお聞きしたら、「たばこの本数も酒の量も元にもどっている」とのことので安心していただけだが……。かつて《胃潰瘍も酒で治した》前田監督のこと、絶対大丈夫だと思い込んでいた。

前田監督と最後に話したのは昨年5月頃、前田監督の力作『わが聖なる島一硫黄島巡行記』を含むかなりの量の文章『エッセイごっこ』（『酩酊船』第11集）を読んでいながら返事を書くのを怠けていたら、「あちこちから反響が

きているのに、どうして返答してこないのだ」というお叱りの電話であった。こちらは後ろめたい気持ちがあったから些かしどろもどろになってしまい「竹内さんの方に返事を出しましょうか」と言ったら、「こちらに送ってくれば、竹内にファックスで送るから」との御返事であった。僕は、前田監督がこのエッセイに賭けていた想いを分かっていなかった不明を恥じなければならぬ。その後慌てて書いた『エッセイごっこ』の感想が、前田監督への最後の手紙になってしまった。

★出棺のとき、たまたま側におられた佐藤正プロデューサーと目が合い、ともに本堂に駆け寄って、数人の人達と前田監督の柩を抱えて霊柩車に納棺させていただいた。僕は心のなかで何度も呟いていた―「さよなら…前田陽一監督」。ふと、阪本順治監督『傷だらけの天使』（97年）のなかで豊川悦司が言う台詞が心を過った―「さよならっていうのは、いい言葉だよな。……。また会えからよ」。

★それにしても11年とは、あまりに長すぎた。『憧憬通信』に皆さんからいただいたお便りをワープロで打ち込みながら、あらためてその時の重さに打ち拉がれそうになった。皆さんの前田映画への想いを、生前の前田監督にお読みいただけなかったのが悔やまれる。

高橋清さんは〈前田映画にこだわり続けてきた想い〉を、高橋千代さんは〈前田監督と過ごした幸福な時間〉を、それぞれ胸を打つ追悼文として寄せてくださった。我等は、前田ファンであり続けてきたことを誇りにしたいと思う。

【TOSHI】

前田映画ファンマガジン 憧憬NO.14

特集 さよなら……前田陽一監督 1998.11発行

編集発行人・牧村利光 発行所・前田えいが ばらだいす

〒633-0001 奈良県桜井市三輪404 牧村利光方

TEL 0744 (42) 6403 / 0744 (45) 2307 [夜間]

FAX 0744 (45) 2307

前田映画たちよ！

永遠に……

